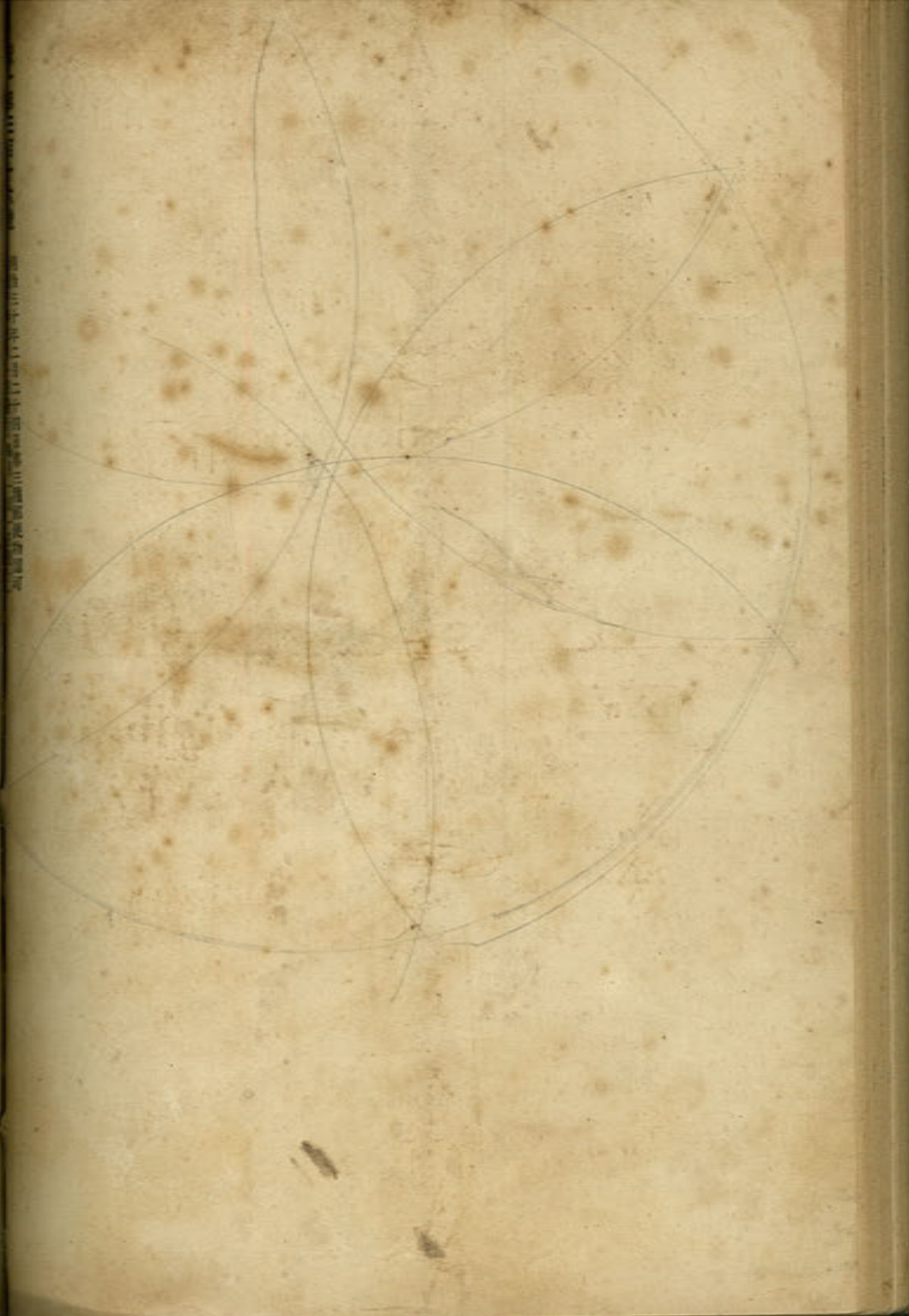




次 目

開宗の事實及び理想(時言)	本多日生
健全思想とは何ぞ(法幢)	本多日生
教育勸語と思想問題	本多日生
本經祖書要文講義	本多日生
日蓮聖人教義綱要	井村日成
宗門史料	山根日東
記事報道十數件	

第廿五年六月號



傳宣大義主蓮日の寺德常屋古名



中央、五月十三日名古屋驛より常徳寺へ廣小路通を梵鐘搬入。上圖右五月二十一日日經上人三百遠忌法要に天童釋見山門内に練込みの



光景。上圖左五月二十二日日蓮上人聖誕七百年慶法要。下圖右今回新改築の大書院に僧員集集。下圖左統一閣支部宣傳部員。



開宗の事實及び理想

(統一閣に於ける四月二十八日の講演)

本多 日生

目次

一、開宗の事實

イ、唱題と宣教……ロ、松野殿御書……ハ、松野尼御返事……ニ、聖人御難事……ホ、中興入道消息……ヘ、波木井殿御書

二、開宗の理想

イ、宇宙の大真理……ロ、本佛の大慈悲……ハ、上行の大抱負……ニ、日本國の天職……ホ、日蓮主義者の自覚……ヘ、佛敎の方便と眞實……ト、開宗理想の徹底觀……チ、佐前任後相違の聖訓……リ、佐前任後相違の内容……ヌ、萬有神敎的の題目……ル、本佛よりの題目……ヲ、本佛に對する覺醒……ヅ、開宗の第一義……カ、堯山日輝師の手簡
以上

一、開宗の事實

イ、唱題と宣教

時言 開宗の事實及び理想

本日は日蓮聖人開宗記念の法要並に講演會を開催せられたのでありますが、私は九州の方に參つて居りまして、前刻歸京をしたやうな事で、法要にも列席することが出来なかつたのでありますが、幸に講演に間に合ふことが出来まして是よりお話を致すのは、誠に有難く存するのであります、それで私は「開宗の事實及び理想」と題して聊か所見を申述べようと思ふのであります。

日蓮聖人の開宗は御年三十二歳、建長五年四月二十八日、旭日あさひに向つて十度ばかり題目をお唱へになつた、その時が開宗であると申して居りますが、これは日蓮聖人が自からその時を開宗だと言はれたのではないので、後人が旭日に向つて題目を唱へられたのが開宗だと言出したのであります。それが間違ひではないので、後人が旭日に向つて題目を唱へられたのが開宗ではないと私は思ひます。日蓮聖人がこの四月二十八日にんじふはちの光景を書かれて居る御遺文の全體を綜合して考へますと、その日「清澄山の持佛堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめ」といふことが書いてあります、それは此の日の光景を書かれた御遺文に出て居る事であつて、朝早く題目をお唱へになつた事と、さうして丁度十二時の刻限から兄弟弟子並に少しばかりの在家の者に對して説教をなさつた、その説教を併せて開宗と言ふのであらうと思ひます。自己の信仰表白ばかりでは開宗ではなくして、その信仰を基礎にして教を説き始められた、寧ろその開教——教を開き、教を説くといふ方が開宗の大事な事實であらうと思ふ。それ故に日蓮宗は自分一人信心して居つても、教を宣傳することが停つた時、宗旨が滅びたと言つても宜いだらうと思ふ、この教を宣傳することが開宗の事實の一番大きな、大切な點であらうと思ひます。宗旨といふ以上は、一人だけが信心して居つたのでは私は宗旨と言はれないと思ふ、それは個人の信仰ナンである。宗教が宗旨を聞くといふのはその

教を以て他を説き導いて、一人よりは二人、往いては一天四海を妙法に歸せしめやうとする所の、この弘通宣傳の活動が宗旨を聞くといふことであらうと思ふ。それが爲にその事實をイマ少し明かにして置かないと、何かうまいやうな事を思ひついて言ひ居るなと思はれるといけませぬから、諸種の御遺文のその事に關する所を簡単に御紹介をして、それから自分の考を申述べて見ようと思ふのである。

□、松野殿御書

先づ「松野殿御消息」に、

此の法門は教主釋尊は四十餘年が間は胸の内にかくさせ給ふ、さりとはとて、御年七十二と申せしに南閻浮提の中天竺王舍城の丑寅うしとら、耆闍崛山にして説かせ給ひき。今日本國には佛御入滅一千四百餘年と申せしに來りぬ、夫より今七百餘年なり。先き一千四百餘年が間は日本國の人、國王大臣乃至萬民一人も此事を知らず。今此の法華經わたらせ給へども或は念佛を申し、或は眞言にいとまを入れ、禪宗持齋など申し、或は法華經を讀む人はありしかども、南無妙法蓮華經と唱ふる人は日本國に一人も無し。日蓮始めて建長五年夏の始より二十餘年が間唯一人、當時の人の念佛を申すやうに唱ふれば、人ごとには是を笑ひ、結句はのり打ち切り流し頸をはねんとせらるること、一日二日一月二月一年二年ならざれば堪ふべしともをばえ候はねども云云。(遺文一三七七—一三七八)

とあります。この場合には南無妙法蓮華經と唱ふことが日蓮に依つて始めてであるとお書きになつて居ります。けれどもこの南無妙法蓮華經と唱へるといふことは、此の文章にあります通りに「此の法門を教主釋尊は四十餘年が間は胸の内にかくさせ給ふ」とあつて、法華經に於てこの法門を説き始めたのである。

それから日本にこの法華經が渡つたけれども、法華經の精神に基く所の信仰修行が行はれなかつたといふ事があるので、この場合は唱へるといふ事が主になつて居るけれども、やはり教を立てるといふことにならる、即ち「唱へる」といふ事の教を立てるので、それが晝間の持佛堂の説教となつて、他の宗派がやつて居る所の佛教修行の誤りを説き諭される事が加はつて、始めて宗旨といふ事が開かれるのである。説教をしないで唯だ自分が山の上で日様に向つて題目を唱へただけならば、これは宗旨といふ事にはなるまいと私は考へる。それで此文章では未だはつきりしないけれども、その他の文章を併せて讀めば段々明かになつて來るのであります。

ハ、松野尼御返事

次には「松野殿後家尼御返事」に、

去ぬる建長五年の夏の頃より今に二十餘年の間、晝夜朝暮に南無妙法蓮華經と是を唱ふる事は一人なり。念佛申す人は千萬なり。予は無縁の者なり、念佛の方人は有縁なり、高貴なり。然れども獅子の聲には一切の獸聲を失ふ、虎の影には犬恐る、日天東に出てぬれば萬の星の光は跡形もなし。法華經のなき所にこそ彌陀念佛はいみじかりしかども、南無妙法蓮華經の聲出來しては、獅子と犬と、日輪と星との光くらべのごとし。譬へば鷹と雉とのひとしからざるがごとし云云。(遺文一八三七—一八三八)とあります。此處でも唱へる事が比較されて居りますが、これもやはり日蓮聖人がこの念佛の效能とお題目の效能とを比較して、即ち獅子の聲には一切の獸が聲を失ふといふ優劣を説明せられる所に、私は宗旨建立といふ事が言はれると思ふのである。この説明を加へないで、法華經の意義を宣傳しないで、唯南無妙法

蓮華經と唱へて居るだけであつたならば、宗旨といふものは開かれなくてあらうと思ふのである。それは日蓮聖人の信仰決定とか、信仰告白といふ事は言へるけれども、開宗といふことにはならぬと思ひます。

二、聖人御難事

それから其の次の御遺文としては「聖人御難事」此に至つては愈開宗の事實はその教を説く事ぢやといふことが判然として居るのであります。

去ぬる建長五年四月二十八日に、安房の國長狹郡之内東條の郷、今は郡なり。天照大神の御ぐりや、右大將家の立て始め給ひし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。此の郡の内清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして、午の時に、此の法門申し始めて今に二十七年、弘安二年なり。佛は四十餘年、天台大師は三十餘年、傳教大師は二十餘年に出世の本懐を遂げ給ふ、其の中の大難申すばかりなし、先先に申すが如し、余は二十七年なり、其の間の大難は各々かつ知ろしめせり。法華經に云く、而も此の經は如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況や滅度の後をやと云云。(遺文一八七五)

この法門を申しはじめるといふことが開宗の事實であります。日蓮聖人が持佛堂に於て説教せられたその説教が宗旨建立であります。それ故に開宗といふ言葉は甚だ疑問になりますけれども、他の語を以て言へば「開教」といふことである。教を開くといふ事はどうしてもこの教を説き示すといふことでなければならぬ。故に昔から「大教の開闢」と云うてありますが、開闢とは「闢」はあきらかにするといふ字で、教を明かに人に説き諭すことである、教を説き諭すことが無くなれば宗旨は無い譯である。

ホ、中興入道消息

それから『中興入道消息』、之には判然と今申す教を説き弘めることを述べられて居る。

去ぬる建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年間退轉なく申しつより候事、(申しつよめて行くことである)月のみつるがごとく、潮のさすがごとく、はじめは日蓮只一人唱へ候ひしほどに、

見る人値ふ人聞く人、耳をふさぎ、眼をいからかし、口をひそめ、手をにぎり、齒をかみ、父母兄弟師匠善友もかたきとなる。(遺文一九二〇)

此處には最も明かに私が今主張する所の、唯だ南無妙法蓮華經と唱へるばかりではないといふ事がはつきり書いてある。それはその前文の所でありますが、

日本國七百餘年に一人も未だ唱へ參らせ候はぬ南無妙法蓮華經と唱へ候のみならず、皆人の父母の如く、日月の如く、主君の如く、渡りに船の如く、渴して水の如く、うえて飯の如く思いて候南無阿彌陀佛を無間地獄の業なりと申し候故に、食に石を炊いたるやうに、巖石に馬のはねたる様に、渡りに大風の吹き來るやうに、聚洛に大火のつきたるやうに、俄にかたきの寄せたる様に云々。(遺文一九一九)とあります。この南無妙法蓮華經と唱ふるのみならず、此の教は斯ういふ意味だといふことを説き示される事、それが日蓮聖人の開宗である。唯だ意味も判らず唱へて居るだけ——或は假令腹に判つて居つても自分だけが唱へて居るのは、宗旨を開闡するといふことにならぬと思ひます。であるから旭日に向つて題目を唱へられたのが開宗だと言つたのは、それは間違つて居る。唱へてさうしてその意味を持佛堂に於て説明をせられた、その説明の方が開宗の主なる事實であります。

へ、波木井殿御書

それから『波木井殿御書』、是は偽書だといふ議論もありますが、兎に角参考に申して置きます。

生年三十二歳にして建長五年三月二十八日、(此の方はどういふ譯か三月となつて居る)念佛は無間の業なりと見出しけること

時の不祥なれ、如何にせん、此の法門を申さば誰か用ふべき云々。(遺文二一〇七)
とあるので、此の御書には念佛無間等の説教をせられた方の事を言うて居られる。それで私は誰だ説教だけを開宗と言はなければならぬと云つて、サウ其點に力を入れる譯ではありませぬけれども、宗旨を開くとか、宗旨を弘めるとかといふことは、誰だ個人の信仰に依つて、本尊と對自己との間に信心修行をして居る事ではなくして、その修行をして居る所の意味合を説明して、これが一番宜しいといふ、その宣傳が宗旨を開く、宗旨を弘めるといふことになると思ふのであります。それは餘程大事の關係が一切の活動の上から起つて來るのでありますから、特にその事を申添へて置くのである。

二、開宗の理想

イ、宇宙の大眞理

それで斯ういふ風に旭日に向つて題目を唱へられ、さうして持佛堂に於て説教をせられた、この二つの事實に依つて宗旨が開かれたのであるが、その開かれた事實の中に含まれて居る理想、意味合はどういふものかといふ事を、少し申述べて見たいと思ふのである。これは様々な意味がある。お日様に向つて題目を唱へられる事實についての理想、意義は非常に深い事である、持佛堂に於て説教せられた、その説教せられた意義も非常に深い事がある。それは現れて居る事實だけではないので、非常に深い包含せられて居

る所の日蓮聖人の思召がそこに閃きとなつて現れて居るのであります。お日様に對して南無妙法蓮華經と唱へられる事は、何もお日様だけではないのであつて、非常な大きな事を日を象徴として——モツと判り易く言ふならば宇宙の大真理が大太陽の光のそこに體現して居るものとして之を觀て居られるのである。宇宙の大真理に對して自分の信仰を告白しようとしても眞闇がりの天に向ふよりも、或は曇つて居る日の見えない天に向ふよりも、又晴れ々として居つても日暮のお日様などに依らずして、新しきそこに旭日の光が現れて居る、この全宇宙の絶対真理の輝きを旭日の光に象徴して、その大真理の前に日蓮が立つたものであると私は考へる。日は肉眼に見えるものに於ては最も大きなものだけれども、肉眼を超越して居る。宇宙の大真理は日よりも更に——廣大なるものである。あるけれどもそれは眼に見えないからして、恰度「神州由來正氣あり、秀てては不二の嶽と爲る」といふやうなもので、粹然として宇宙の正氣が日本に鍾つて居る、その天地正大の氣といふものは、富士の山ぐらゐのものではない、けれども、その偉大なるものを象徴するには先づ富士の山に於て之を見るより仕方がないからして、そこで日本の偉大なる正氣を富士の山に象徴したものである。又日本の美しさは櫻の花ぐらゐのものでないけれども、先づ形にあるものとしては櫻の花の美しさに比するより仕方がないからして、「發しては萬葉の櫻となる」と言つたものである。恰度その通りに、太陽の光よりもヨリ偉大なる光を有つて居る所の、絶対無上の妙法の眞理に對して日蓮は拜跪するのであるけれども、日をその表現、象徴としてそれに向はれたものであると思ふ。

ロ、本佛の大慈悲

更に日蓮は唯だ宇宙の形なき眞理に對して信仰をして居る人ではなくして、その場合には判然言うては居ないけれども、後の文章より考へると、凡て日蓮聖人の佐渡以後に現れる信仰も教義も觀念も、この日蓮の時すでに定まつて居つたといふことを日蓮は言うて居る。初めには考が足らなかつたけれども後から附加へたといふことは日蓮聖人は言はない。發表の順序は佐渡以前と佐渡以後が違ふけれども、自己の信仰としてはその間に何等異動がないと言うて居る。故にその當時外部に言ひ現はした言葉には未だ判然して居らぬけれども、後「開目鈔」等に於て説明せられる所の、本佛の無上の光——毒量品に於て顯れて居る所の大慈大悲の本佛の御光を仰いで、それを有形のものとしてはやはり太陽の光に象徴して、本佛在せば我が肉眼で見る太陽の光よりも偉大なる光をお示しになつて居るものとして、太陽に向はれたものと考へます、その事は日蓮聖人の御文章を以て現はすことが出来るので、日蓮聖人が日を以て説明せられる場合は佛の大慈大悲を指されて居ることが御遺文の中にあります、開目鈔に「一切教の中にこの毒量品なくんば天に日月なきが加し」と示されて居る。

ハ、上行の大抱負

それからモウ一つは法華經の中に、上行菩薩が此の世に出て、衆生の闇を除く事は日月の光の如しといふ事があるから、それは自分の事ではあるが、やはりこの太陽の光が世界を照す様に、釋尊の委託を受けたる上行——實は自分であるが、その日蓮の世に出て働く有様は、この太陽の光の様なものである。太陽は間違ひなく世の闇を照す、その日月の如しと言はれた日蓮も、此の太陽の光のやうに、日本を輝かし乃至世界を輝かすといふこの任務を果し了らぬ様な事ではいけないとの決心を籠めて、太陽に對して自分の責任の自覺をそこに現して、南無妙法蓮華經と仰しやつたものだらうと思ふ。その場合には自分の責任

の重きを感ずると共に、又自信力といひますか、抱負といひますか、信念といひますか、日蓮聖人自身が日の光には負けない、日蓮は必ずやこの信念に依り、この學び得た教に依つて一切衆生の闇を照す事、太陽の光に劣らない活動を爲し遂げるといふ自信力と抱負を以て太陽に向はれたのであらうと思ひます。その日蓮聖人の心の中を言へば、やはり釋尊の慈悲が日の如くであるが、日蓮が一切衆生を救ふ所の慈悲も亦太陽の光になぞらへて、それに劣らない光を現はさうとして、「日蓮が慈悲曠大ならば」とか、「日蓮が立て申す法門は日出でて後の星の光」とか云ふ事を言はれて居る。我が此の信念、我が此の教義、日蓮の智見、日蓮の慈悲の光は太陽と光を争ふものだといふ自信力もそこにお有ちになつたと思ふのであります。

要するに萬感胸に迫るといふことであらうと思ふ、逆も是れは解剖さるべきものではない。その清澄山頭に曉天を待ち兼ねて、旭日の東天に昇るのを見定めて、心靜かに南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へられた時の日蓮聖人の御心中はどういふものであらうか、その莊嚴なる事、その雄大なる事、その神々しい有様、これは言葉で以て説き盡せない事であつて、姑く分解をして見れば、爰に宇宙の真理は輝けり、茲に本佛の慈悲は輝けり、此に本化上行の責任は輝けり、日蓮の學び得たる知識、教義、信念、責任の自覺に依つて、必ずや此の日の光の如くに日本乃至一閻浮提に光を輝かすであらう、一天四海は遂にこの妙法に歸するに違ひない。世界に人類多しと雖も日の光に反抗するものは無い、日の光に敵する者は無い、日の光に感謝せざる者は無い、何れの日か必ずやこの尊き教、この尊き信仰の下に感謝をするであらうと考へられたものであると思ひます。

二、日本國の天職

まだモウ一つのところに大きなものがあるでせう、今まで申したのは教の側から見たのであるけれども、一面日蓮の所謂「法を知り國を思ふ」のこの國家的觀念の方から申せば、日本の國は八萬の國にも超えたる國であると言ひ、又只今讀んだ「聖人御難事」にもあつた通りに、安房の國の清澄山のある所は誠にめでたい所であつて、天照大神の御くりやがある。これは日本第二の處といふけれども、又第一の處とも言ひ得られるやうな結構な處である。この天照大神の御くりやがあるといふ事から悦びを述べられて居る所には、天照大神の此の國を建てられた思召、所謂「六合照臨」といふか、「天下を光宅」といふか、日本は往いては全世界の光となつて、全世界の惱める者を救ひ、全世界の苦しめる者を濟す所の偉大なる國家の天職を果さんければならぬ、所謂「日本」と稱して、日の光を本として立つて居る國であるから、必ずやその國家の天職、建國の理想を實現しなければならぬが、それは唯出來ることではない、どうしても精神的の文化を啓いて、高い宗教、道徳、哲學等の高等なる文明を日本の國に打樹て、世界の人類が仰ぎ瞻るやうな大眞理を日本の哲學よりして現はし、世界の人類の信仰を捧ぐべき最上の宗教を日本の國に打樹て、世界の人類の守るべき偉大なる道徳を日本の國に打樹て、理想的なる精神の文化を日本に建設して、さうしてその光を以て全世界を濟はなければならぬ。それは日蓮の學び得たるこの法華經を中心にしたる、そこから最高の哲學、最高の宗教、最高の道徳——最後の最後まで一閻浮提の一切衆生の濟はるべき精神文化の光は此の内から出るものである。それを以て大日本帝國に獻じて、所謂「法を知り國を思ふ」と言ふか、「法國冥合」と言ふか、日本の國にこの偉大なる精神文化を明にして、さうしてこの國の榮と共に、「國は法に依つて昌へ、法は人に依つて貴し」——「法は體なり國は影なり」——この偉大なる法を日本の國に

建設して、非常なる理想のあり、意義のある國家として、世界に光を輝かさなければならぬ。「日は東より出て、西を照す、佛法必ず東土の日本より出づべきなり」と言つたが、その場合の「佛法」といふのは大きな意味で、一乘の佛教であるが故に、普通人の考へるやうな小さい意味の佛教ではない、世法即佛法、一切諸法皆な佛法ならざるなし、摩訶衍の法とは世間出世間の善法悉く捲いて之を佛法と謂ふのであるから、今の所謂無上の價值ある所の哲學、道德、宗教、その他理想の文明を導き來るところの總てのものを總括して、之を日蓮が佛法と謂つて居るのである。即ち今の言葉にして言へば日本の精神文化である。その世界に起るべき精神文化が先づ日本から興るといふことを、お日様に向つてお考へになつたものと思ふ。故に萬感胸を撞いて來るものであつて、一面には責任の重きを感じ、一面にはその教の偉大に打たれてさうして南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經とお唱へになつたのである。

ホ、日蓮主義者の自覺

吾々日蓮聖人の流を酌む者がこの開宗の記念に際會したならば、その時唱へる題目の中にはやはりその意味を裏んで信念としなければならぬ。日蓮聖人は萬感胸を突いて唱へた題目を、こつちは空つぽて唱へて居るといふ事はいかぬ。日蓮聖人ほど大きく、日蓮聖人ほど整はないにしても、そこに力あり、光あり理想あり、目的あり、所謂非常な渴仰の心もあれば、そこには非常な希望もあり、そこに非常な自分の満ち足もある、何とも言へぬ萬感胸を突いて來る南無妙法蓮華經、この精神の充實したる所の南無妙法蓮華經を持たなければならぬと思ひます。「唯ナンでも宜いから唱へろ」といつた行き方はどうしても面白くない。故にどうか吾々は充實したる精神の表現として南無妙法蓮華經を唱へたいものであります。

ヘ、佛教の方便と眞實

それから説教の事實であります、その日の説教は主として法華經の眞實であり、他のお經の方便であることを説かれて、方便の教に基いて宗旨を建てたといふことは絶対に悪い、罪惡これより大なるものは無いといふ説教である。佛教は釋迦一佛の所説であるから、孰れおろかはないやうであるけれども、方便の教に囚はれて眞實の教を敵とするならば、佛教は寧ろ無い方が宜いと日蓮聖人はお考へになつたのである。此の點は日蓮主義者の造次顛沛にても忘るべからざる所であつて、細かい事は判らぬにしても、方便の教と眞實の教のけぢめだけは考へて、佛教は大事であるけれども方便の教に落ち込んで、自分も救はれないのみならず國をも誤るし、釋尊出現の目的にも背く、佛教法敵、現在には國を亡ぼし死後には地獄に墜ちると日蓮が斷言した、方便の教に執着する事の罪惡なることを徹底的に考へるのが宜いのおぢや、其點が開宗の説教の根本精神である。一時にいろ／＼の宗旨の批評はせられて居らぬので、主として淨土門に當られては居るけれども、方便の教に依つて眞實の教に敵し、垂迹の佛に流れて本佛を敵とする事を攻撃せられた事に於ては、之を推演して行けばどのやうにも擴がつて行くのである。

ト、開宗理想の徹底觀

そこでこの説教の精神であります、この時には阿彌陀如來を信じて居る様な所を攻撃せられて居る。その攻撃せられるのに、南無妙法蓮華經を唱へる事を以て南無阿彌陀佛を唱へる事に對抗して説教せられたと普通考へるけれども、それは佐渡以前の法門と日蓮の言ふのは其點ぢや。これがこの説教に對しての事實を解釋する上に非常に大事な點であります。その事を今晚は主にお話して見たいと私は考へて居る。

旭日に向つて唱へたる題目は今申すやうな理想から來て居るけれども、その南無妙法蓮華經といふのはどういふ意味のものか？ 持佛堂に於て説教せられて方便の教を斥けたその意味は、徹底的に考へたらどういふ意味のものか？ この二つに正確なる意識がなければならぬ。唯だ皮相的に考へれば、日蓮の開宗とは題目を唱へて説教した、題目は南無妙法蓮華經だ、説教は念佛無間ぢや……それで濟んで居るけれども、それだけでは眞の日蓮の宗旨は開かれて來ない。日蓮の唱へる南無妙法蓮華經の意義如何、説教の意義如何といふことになつて參ると、これは佐渡以前の法門は佛の爾前の經と思召せと言はれて居るから、唯外部に現れて居る説明を見ただけでは、その觀方は改めなければならぬことになる。日蓮の攻撃する所の、方便の教に依つて眞實の教に敵するといふ事が絶対の罪惡であるとするならば、日蓮が佐渡以前の教は方便なり、佛の爾前の經と思召せと言つた、この佐渡前後の區域を明にすることが出來ずして、日蓮の佐渡以後學生の眞實を顯したる教義に反對をするやうな思想を、佐渡以前の御遺文の中で學び得て執着するならば、恰度釋迦の教の方便の經に流れて眞實の教に敵したる、日蓮が墮獄の人と言つたと同じことになりはしないか。釋尊の教は方便に依つては悪いが、日蓮の教は眞實の顯れない佐渡以前の方便の説明に固着して宜しいといふ事はあるまい、それが大問題だ。所が無學の輩が不徹底な事をやつて居つたから、今日この弊害多き宗門となつてしまつたのである。佛教各宗に就て言へば、釋尊の方便の教に流れたるが故に佛教が混亂墮落したのである、日蓮の門下が墮落して居るのも亦日蓮が眞實を顯はさない所の教を上すべりにやつて行くから今日の如く腐敗した門下が出來たのである。故に釋尊の教を聽くならば眞實の法華經に來るべし、日蓮の教を學ぶならば佐渡以後の眞實の聖訓に來るべしといふことは、これは日蓮主義

者の造次顛沛にも忘るべからざる事である。

子、佐前佐後相違の聖訓

それならば何處が佐渡前、佐渡後の違ひか？ これは餘程嚴密に論究しなければならぬので、古來「日蓮教學の大事は佐渡前後の相違なり」と言はれた、それだけの言葉だけは知つて居る。「佐渡前後の相違を知らなければならぬ」といふ事は知つて居るけれども、事實その違ひは判らぬ、實に愚な事ぢや。それは「三澤鈔」の文を一遍御紹介して置かねと徹底をしないから申しますが、「三澤鈔」に斯う仰せられて居る。

又法門の事は佐渡の國へながされ候ひし已前の法門はただ佛の爾前の經とをばしめせ。(佛の爾前の經といふのは法華經より)此國の國主我が代をもたつべくは眞言師等にも召し合せ給はんずらん、爾の時まことの大事をば申すべし。弟子等にも内内申すならば披露して彼等知りなんず、さらばよも合はじと思ひて各各には申さざりしなり。然るに文永八年九月十二日の夜籠の口にて頸を刎られんとせし時より後、ふびんなり我につきたりし者どもに眞の事を言はざりけると思つて、佐渡の國より弟子共に内内申す法門あり云云。(遺文一七〇五——一七〇六)

この「内内申す法門あり」といふのは「開目鈔」の事を謂ふのですが、「我につきたりし者共に眞の事を言はざりけると思つて」と云ふは、本當の事を言はずに居つた、可哀想な事ぢや、幸に龍の口の頸の座はのがれたけれども、若し頸の座で是さき日蓮が死んで居つたならば、眞實の事を知らさずに終るのであつた、思へば不便な事である、今度佐渡の國に流されることになつたけれども、佐渡の國でどういふ災難が起つて日蓮が何時殺されるかも判らぬからして、今度は本當の事を言つて置かなければならぬと仰しやつ

たのである。それは「種々御振舞御書」を併せて御覽になると能く判る、

依智にして二十餘日(日蓮聖人は龍の口の法難以後依智の方におられた)其の間鎌倉に火をつける事七八度、或は人をこゝろす事ひまなし、讒言の者共の云く、日蓮が弟子共の火をつくるなりと、さもあるらんとて日蓮が弟子等を鎌倉に置くべからずとて、二百六十餘人に記さる、皆遠島へ遣はすべし、牢にある弟子共をば頭をはねらるべしと聞ふ。さる程に火をつける者は持齋念佛者が計り事なり、其由はしげければ書かず。同十月十日に依智を立つて同十月二十八日に佐渡の國へ着きぬ云々。(遺文一三九七—一三九八)

日蓮聖人が佐渡ヶ島にお着きになつたのは文永八年十月二十八日——舊曆であるから最早や雪が降りつゝある頃であつたのである、その佐渡ヶ島の塚原三昧堂の光景は、

塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる所に、一間四面なる堂の佛もなし。上は板間あはず、四壁はあばらに雪ふり積りて消ゆる事なし。かゝる所に敷皮打ちしき糞うちちて夜をあかし日をくらす。夜は雪、電、雷電ひまなし、晝は日の光もささせ給はず、心細かるべき住居なり。(遺文一三九八)

とお書きになつて居ります。それで十月二十八日に佐渡の國に着かれて、「開目鈔」の筆を執り始められたのは直ぐ十一月であるから、二日三日お休息になつて直ぐ筆をとられた、それは「三澤鈔」にある所の、眞の事を言はずに死んだら可哀相だといふので、直ぐに筆をお執りになつたので、その十一月から「開目鈔」を書かれたといふ事も「種種御振舞御書」にあります、

去年の十一月より勸へたる開目鈔と申す文二巻造りたり、頭切らるるならば日蓮が不思議留めんと思ひて勸へたり。(遺文一四〇三)

この頭切らるるならばといふのは何處だ、これは龍の口の事ではない、龍の口では頭切れずに済んだ、けれども佐渡ヶ島へ表面は流罪といふけれども、内々殺しても宜いといふやうな事になつて居るから、誰が殺しに来るかも知らぬ、現に阿佛坊なども殺しに来たのぢやが、その外にも日蓮を殺しに来た事もあるし、偽の頭切状を三度までも拵へて來て居る。だから「頭切らるるならば」といふのは、佐渡ヶ島へ渡つてからも殺されるかも知れぬが、何時殺されても後に心残りのないやうに、日蓮の弟子檀那に眞實を言はずに死んだといふ事があつてはならぬといふので、頭切らるるならば日蓮が不思議を留めようと思つて勸へた、それが「開目鈔」ぢや。

それ故に佐渡ヶ島の「開目鈔」の所まで來ない間は、眞實を言はずに日蓮聖人が居つたといふことであります。「三澤鈔」にも「佐渡の國に流され候ひし己前の法門は佛の爾前の經と思召せ」「眞の事を言はずりけると思つて」とあり。又「種々御振舞御書」にも「頭切らるるならば日蓮が不思議とめんと思ひて勸へたり」とあるのであるから、この點を判然しなければならぬ。日蓮主義が段々勃興して、殊に今年以降降誕七百年記念として到る處に日蓮主義を宣傳して居るけれども、恰度佛教が非常に熾んなるに似て、方便の教が弘まり過ぎて佛教に累をなしたやうに、日蓮主義が勃興するに似て眞實を説かぬ方の方便の日蓮主義が跋扈して、日蓮の眞精神が地に墜つるやうな事があつてはいくまい。それ故に唯なんでも日蓮主義なら宜いといふやうな譯のものぢやない、日蓮聖人の眞實をお顯しになつたこの御精神を忘れぬやうにして行かなければならぬと思ふのである。

リ、佐前佐後相違の内容

然らば佐渡前後の相違はどういふ點であるか、それは「開目鈔」になつて見ると、たゞ南無妙法蓮華經を唱へるだけではないかぬ、たゞ念佛無間だけではないかぬ、「開目鈔」は何であるか、冒頭から書いてある、

夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、所謂主師親これなり。(遺文七四七)

といつて、たゞ唱へ言がどうぢや、斯うぢやといふ事ではない、向ふはノーマクナマンダーぢや、こつちは南無妙法蓮華經ぢや、向ふは南無阿彌陀佛ぢや、こつちは南無妙法蓮華經ぢや……といふやうな、唱へ言の音調の違ひ位を論じたものぢやない、吾々の信念を捧げる所の絶対の本尊の上の相違を示されたものである。それはサウでせう、例へば日本の國體を言ふ場合に、皇室の有無は問はない、唯だ唱へ言について「萬歳」と言ふが宜いとか、「めでたい」と言ふが宜いかいふやうな事で喧嘩するやうなものぢや、その意識の在るところ、皇室の尊嚴を載く載かぬといふことを忘れて、「萬歳」と言ふ者も皇室の事は忘れてしまふ、「めでたい」と言ふ者も忘れてしまふといふ事になれば、そんな言葉の相違を論争しても何にもならぬと私は思ふ。

そこでそれも非常な大きな問題であります、佐渡以前の教は唱へ言から來た南無妙法蓮華經である、唱題修行といつて、唯唱題——題目を唱へるといふ事に重きを置いたのが佐渡以前の教である。佐渡以後のは唱へることばかりでない、信念意識を本にしたものである。之を學術的に言うと口業といつて口を第一に置くか、意業といつて意を第一に置くかといふ大きな問題である。意は抜けてしまつても口さへ言つて居れば宜いといふのが唱題修行であれば、ドンドコ法華が出來て千ヶ寺詣りみた様に、ナンメウ——一貫三百どうても宜い、ナンメウコトヤ……といふやうな事になる、聲ばかりのものになつてしまふ。これ

は釋迦如來が印度の婆羅門教に對しても痛撃をした事でありませう。聲ばかりを以て宗教を争うて行き居ると、終には空つボのものになつてしまふ。もう既に今日日蓮門下は聲の弊に堪へないで、聲の宗教となつて意識が減びて居る點が多い、釋迦が出來たならば婆羅門教と同一に視て攻撃せらるべき所の宗教となり終つて居ると私は認めて居る。何が故に此の意識を尊ばざる？ 釋迦は婆羅門に對して始終論じて居る。婆羅門の唱へ言といふものはそれは、えらいものです、逆も今日の日蓮宗どころではない、夜でも晝でも呪文を唱へると云つたならば斷間なしに一生懸命唱へて居る。心の意識は誠に暗愚なものになつてしまつて唯それだけやつて居る。だからお百度を踏むといふやうな事でも、婆羅門教徒は非常な熱心を以てやる。日本のお百度などはまだ——手ぬるい、向ふのはズツと大きな山をグル——廻るので、日本のやうな三間か五間の所を行つたり戻つたりしてごま化して居る様な譯ではない、大きな山の周圍をグル——廻つて飯も食はなければ水も飲まない、寝もしない、息の通はん限りはグル——廻つて居る。それで到頭百遍廻り切るとバタツと死んでしまふ、そこまで彼等はやつて居る。それでもお釋迦様は「そんな事は無駄ぢや、駄目ぢや」といふ事を盛んに説かれた、さうして何を説かれたかといふと「精神に戻れ——」と説かれた、それは餘程大事な點である。モウ宗教の細かい議論や、種々の理窟や何かはいけくない、その心得に戻らなければならぬ。道德でもやはりサウである、教育勅語を毎日々々讀んで居つて見た所が、口では諸語に「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」と讀んでも、一旦事實に緩急あれば真先に逃げ出してしまふやうでは何にもならぬ、これは實に形式の弊である。どうしても今日は精神的に戻らなければならぬ。そこで「開目鈔」は、唱へるといふやうな事からは行かないので、一切衆生の尊敬す

べき主師親——その絶対の御主人、絶対の親、絶対の師匠は誰かといふ事に就いて、絶対の本佛を認めなければならぬ。壽量品を知らざる者は不知恩の者なり。畜生に同じといふ事を論結せられたのが「開目鈔」である。之をどうして日蓮主義者が軽く視るか、開目鈔まで来んければ眞實が顯れぬといふのぢやないか、佐渡以前の法門はたゞ佛の爾前の經と思召せと言はれてあるぢやないか、南無妙法蓮華經と唱へてもたゞ南無妙法蓮華經だけはいかぬといふ事ぢや、「觀心本尊鈔」になつてもやはりその通りぢや、「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す」とか、或は「佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裏みて」とか、みな佛様を意識してそれから唱へる題目でなければならぬ。本佛を意識せずして法華經を讀んだり題目を唱へたりするものは全然駄目ぢやと云ふのが日蓮主義ぢや、本佛を忘れても法華宗ぢや、日蓮主義ぢやといふ事がどうして言へるか、それは壽量品を忘れてしまひ、「開目鈔」を忘れてしまつた者である。その點を打込んで初めて日蓮主義が成立つたのぢや、その外はみなごま化しぢや、そんなものは今にいけなくなる事が判つて来る。段々日蓮主義が研究せられて行つたならば、只今私が申す事が能く判つて來ると思ひます。

それで初めて題目を唱へられて居る時には、その意味がちよつと判らぬ、この南無妙法蓮華經が釋尊の御慈悲から出て唱へるといふ意味の所に行かずして、唯だ南無妙法蓮華經と唱へて居る、これが表面から見れば佐渡以前の題目ぢや。けれども日蓮聖人は心の中には初めに申した通りに釋迦牟尼佛を意識せられて居ること故に、その事は「顯佛未來記」に於ても、

日蓮此の道理を存すること既に二十一年。(遠文九七七)

と言はれて、さうして尙ほそこに續いて仰しやつて居る事は、非常に釋尊を渴仰せられて居るのであります。

日來の災ひ、月來の難、此の兩三年の間の事既に死罪に及ばんとす、今年今月萬が一も身命脱れ難きなり、世人疑あらば委細の事は弟子に之を問へ。

是はモウ訣別の言葉ぢや、佐渡が島へ流されて、今年今月はモウ愈々助かるまい、萬が一にも身命を脱れる事は出来ぬ、佐渡ヶ島で自分は死んでしまふ、後の事はどうぞ弟子に聞いて呉れといふ。さうしてその次に何と仰しやつたかといふと、實にこれは感激の多い御文章である。今でも日蓮聖人が此處にお在になつて、さうして御臨終になるといふ傍へあなた方が行つたとしたら、日蓮聖人は何と仰しやるか、モウお前等に教を説き聞かす事は出来ぬから、能く教へて置いた弟子共に法門の事は聽いて呉れ、たゞ日蓮の悦びを述べれば、

悦ばしい哉未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らんことよ。

夜も晝も慕ひ奉つて居る所の絶対の本佛に値ひ奉ることが出来る。法華經の爲に頸は切られても、直ちに釋尊の懐ろに入る日蓮である、お前等も法華經の爲に迫害が來つても悲しむことはない、あゝ辛いと云つてもそれは一時である。頸切られれば直ぐ絶対無上の本佛釋尊の手に抱かれるものであるといふことを告げて居るのである。宗教がこの無上絶対の本佛を意識せずしては、本當の有難いといふ感じは起らぬものぢや。本佛を除つてしまつてお題目ばかり有難いと思つて居つて見た所が、何處へ行くのぢや、お題目の字が有難いといつてパツと飛込んだ所が、羊か何かならば紙でも喰ふか知らんけれども、人間が字にパツ

とぶつかつたつて何にもなりはせぬ。我が理想とする彼方には本當の慈悲もあり、智慧もあり、お相は三十二相八十種好とも何とも申しやうのない微妙壯嚴の、實に理想的なる本佛が待つてお在て下さる、何時でも信仰の定まつて居る者は、法難のために死ねば尙更であるが、たゞ壽命が盡きた臨終の刹那に迫つても、苦しい臨終の刹那の終りのそこは直ちに本佛の袖に抱かれるものである。「如説修行鈔」にもある。「靈山會上にて御契約なれば須臾の程に飛び來りて手を取り肩にひつけて靈山へはしり給ふ」といふ、この佛の大人格に吾々が觸れる所に信仰の悦びがある。又自分自身も何になるのが有難いかといつたら、壽命も盡さず、悪い事もしない、滅びもしない所の常住不滅の佛身を成就して佛様に成り終るといふことが、宗教の最高の希望であります、此の事を除いてはあとは宗教の第二義門である。

又、萬有神教的の題目

それで南無妙法蓮華經の中には一切の佛があるとか、一切の法があるとか、一切の物があるとかいふことは、却つて佐渡以前に澤山仰しやつた。「唱法華題目鈔」などを御覽になれば、南無妙法蓮華經の中には何でもあると書かれて居る。たゞ南無妙法蓮華經の中には何でもあるといふ事は、却つて未だ淺い時分の説明ぢや、モツと能く意義を明かにしなければいかぬ。「唱法華題目鈔」には斯う説いてある、

今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて、釋迦一佛の分身の諸佛と談ずる故に、一佛一切佛にして妙法の二字に諸佛皆收されり。故に妙法蓮華經の五字を唱ふる功德莫大なり、諸佛諸經の題目は法華經の所開なり、妙法は能開なりと知りて法華經の題目を唱ふべし。(遺文三四二)

お經でも佛様でも何でも南無妙法蓮華經の中にあると思ふて唱へよといふ、それが一番結構ぢやないか」と言ふだらうけれども、そこがいかぬ所ぢや、それが佐渡以前である。何故いかぬかと云つたならば之を宗教の意識にするかどうか、何でもあるかと思つて居るから南無妙法蓮華經がゴジャ〜になつてしまふ、これは所謂宗教學的に言へば宇宙神教といふか、真言風のかつたい病といふのぢや、南無妙法蓮華經に何でもあるといふ、何でもあると思ふから雜然として、所謂秩序もなければ統一もない、そして法華勸請ぢやといふやうな事になつて、瘡守稻荷といふやうなものが出來て瘡の病も癒して呉れるとか、或は柳島の妙見様といつて白い蛇が御利益があるとか、何でもあるといふのだから終ひにはげじ〜でも蠍蝎でも雪隠蟲でも何でも出て來る、そんな唯何でもあるといふやうな混沌、雜然たるものは、之を眞言的の宇宙神教といふので、大日六六の説といふのはそれだから、眞言の方は何でも構はぬといふことにならぬ。法華經のはさうではない、方便品に於て佛知見をあらはして一切衆生の中の佛性を説明して來て、壽量品に至つて諸佛を統一して本佛を顯はしたので、ズ〜と秩序を立て、來たのが法華經の思想である。それ故に法華經の南無妙法蓮華經は何でも入つて居るといふ南無妙法蓮華經ぢやない、何でも入つて居るといふのは理窟である、「何でも」といふ事は宇宙神教的に變つて行くのぢや。

ル、本佛よりの題目

さうでなくして本尊としては釋迦牟尼佛の絶對を意識して、その釋尊の功德善根一切が南無妙法蓮華經の中に入るといふ事である。壽量品に於て言へば、良醫が諸々の經方に依り好き薬草を求めて搗き菴和合して子に與へて服せしむるといふので、洵に精選せられたる所の南無妙法蓮華經である。神力品に於て

言へば如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事といふやうに、總て如來を通して現れて居る所のものである。「法蓮鈔」の譬にすれば、母が種々なる食物を食つたけれどもその食物の儘ではないのである、その食物が調和されて一つの純白なる所の乳となりて始めて赤子の口に入るののである。それが今の法華宗は消化されない意味になつて来るから、この乳といふものは牛乳を食つたり焼芋を食つたりした乳ぢやといへば、直ぐ赤ん坊が焼芋の方へ行く様に考へてしまふ、さうしてはない、何を食つてもそれが能く消化されて、同じ白い乳となり、同じ味の乳となつて居るのが、釋尊の慈悲を通して智慧を通して吾等に與へられたる南無妙法蓮華經である。どうしても吾等の信仰意識は、先づ絶體本佛の大慈悲に感激せずしては成立たない、そこを通らずして來て居る所の南無妙法蓮華經は佐渡前の思想である。それで行けるものなら日蓮聖人が何も「佐渡以前の法門は佛の爾前の經と思召せ」とか「眞の事を言はざりけると思つて」とか言つて、佐渡以前の法門を否定する理由が無いのである、外の問題ではない。即ち「開目鈔」に於て今申す通り卷頭第一よりして「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり」と書かれた、絶對の主師親三德者、本佛の問題である、それが見透しが附かぬやうでは日蓮の教學を知らぬ人である。

ヲ、本佛に對する覺醒

この問題は大分古いやうでもあるけれども、併しモウ眼が醒めなければなるまい、所が大分醒めて來る、一つ面白い話をする今日も或る所から來て居られるが、單稱日蓮宗の熱心な傳道者であるが「どうも困ります」といふ。何が困るか」と言つたら「どうもいろ／＼な坊さんが大きな顔をして日蓮主義の宣傳ぢや」と言つて落つて呉れるけれども、何を言ひ居るのか譯が判らぬやうな事を言はれる、どつちを向いたか、こつちを向いたか判らぬやうな事を言はれて洵に困ります、宣傳やら提籠やら譯が判らん」といふことを話して居つた。斯ういふ風に段々世の中に於て日蓮主義を渴仰する者は、一歩々々と進んで來て居る。であるからモツと嚴密な教義がなかつたならば、唯だ日蓮が豪傑だつたとか、大きな聲をしたといふやうなことは——それは始めの中は宜い、日蓮は腰抜けだと思つて居る者の爲めには、「イヤ日蓮は豪傑だ」といふことも宜いが、「モウ剛勇果敢なことは判つて居りますが、その剛勇はどういふ信仰から來たものでせうか」、「イヤそれはえらい信仰ぢや」……そんな事ばかり何ンボ言つても駄目ぢや、どうしても宗教の意識に入らなければならぬ。宗教の意識に入つて見ると聲の宗教でもいかぬ、文字の宗教でもいかぬ、先づ言はゞ眞理といふやうなのが餘程よい所だけれども、宗教は眞理といふやうな魂ひの無い冷やかなものからは來ない、どうしても大人格者の貴き佛様があつて、その佛様から來るといふ所に行かん限りには、信仰は落つくものではない、それ故に法華經の中に於ても壽量品が大事であると言ひ、御遺文の中に於ても開目鈔が大事であるといふことになつて居る。

ウ、開宗の第一義

私は開宗の事實を追懐して、その中の日蓮聖人の理想を見る時には、前に申したやうに萬感胸を突いて居るけれども、一番大事な所に戻ればその太陽の光は、所謂釋迦牟尼佛の大慈大悲の御光を象徴したものである、さうしてその日の説教は何かと言へば、念佛を攻撃せられて居るけれども、これに代るに本佛の慈悲を以てせられるものである。唯だ南無妙法蓮華經の唱へ言てはなくして、本佛を以てこれに代

るといふ事になつて行くのであるが、そこをハッキリ仰しやらんから佐渡已前が方便だと日蓮聖人が言はれたのである。何故にそれをハッキリ言はなかつたか、本佛を顯はさなかつたかと言へば、眞言師等に對して一擧に日本の佛教を統一しやうと考へたその大計畫から來て居る、始めからその事を言へば眞言師が公場對決に出て來ないであらうから、少しこちらの弱點を見せて置いて——唯だ法華經が有難い有難いと斯う言つて置けば、彼は未だ佛身觀の上に於て研究が足らぬ奴だ、この點から言へば大日如來の無始無終といふ事を説いて行けば、嘗て天台の慈覺智證等がやられたと同じやうにやつつけ、することは何でも無い、彼れ日蓮は無學にしてア、いふことを言つて居るのぢやと思ふだらう、そこに日蓮主義の弱點があるとして彼等が進んで公場對決にやつて來た時に、始めて眞の大事を言はうといふ一つの伏線を考へられたので、それが即ちこの『三澤鈔』の御文章である。それ故にこの大事を骨抜きにしてしまへば、全く宗教の一番大事な所を忘れることになる、日蓮聖人が開宗に先立つて、御遺文の一番始めにある『戒體即身成佛義』といふ文章を書かれた、これは眞言宗に學問をして居る時の作で、日蓮聖人の御年二十一歳である、開宗は三十二歳である、その開宗に先立つ十餘年前に書いた文章の中に、「この三界は皆これ我が有なりと法華經にある、釋迦牟尼佛がこの天地宇宙は俺が支配して居ると言はれた、この我が有といふ點が大事であるが、これは天台宗では解釋が出來ない、眞言の大日如來に依つてこの宇宙は我が有なりといふ意味が説けるのぢやが、併しこの我が有の二字は大いに注意しなければならぬ」といふ事を書いて居られるので、この事は二十一歳の時に既に知つて居るのである。それが三十二歳の開宗の時になつて、その大事の點を忘れて居る氣遣ひはなないのである。それ故にこの『戒體即身成佛義』に於て我が有の二字を注意せよと言は

カ、堯山日輝師の手簡

この間中は九州を廻りまして、日蓮門下のいろ／＼な派の人にも會ひました、大阪に於ても各教團の人に會ひましたが、段々その意味は皆が了解するやうになつて居るやうである。九州の大分の先に臼杵といふ町がある。その法音寺といふお寺の住職は學徳高き人で、いろ／＼な人の書いた物などを蒐めて居りましたが、優陀那院日輝師が母さんに送つた手紙があつた。それにも今私の申したことがハッキリ書いてある、その手簡は左の如くである。

一筆申上候、御きげんよく被遊御座、めで度奉存候、私も無事御安轉可被下候、今年はいろ／＼用事も多く、狀もおのづからまどをに相成、しかしながら御安ぜん様の様に御きねん怠りなく相つとめ候、いづれ現世安穩後生善處成佛うたがいなき御身にまします間、いきてはみちをき、死してはさとりをまんじ給ふ御事にて、りんじふのきわとおもへば、凡夫の身をすて給ふ時なれば、もうどうひがおもひは、煙の消ゆるが如くきへうせて、さはりなすべき罪もなしとおもへば、何をうれひ給ふ事あらん。たゞ心安く御ぼとけをねんじ、妙法をとなへては、衆生のためにいのりをなし、かつは祖師の恩にむくひ奉り、あげくれ法界回向の御いのり、是れ今生後生の御つとめにて、佛の所作の限りなき修行のはじめどと、たのもしくおぼしめすべく候。恐惶謹言

御は、様

堯山拜書

この手簡の中には臨終の成佛を説き、「御ぼとけをねんじ妙法をとなへては、衆生のためにいのりをなし、かつは祖師の恩にむくひ奉り」と説き、三寶の調和的信仰が善く示されて居る。

今日一般の單稱日蓮宗の人々がこの御佛を信念することを言はないのは、優陀那院師が居られたら誠に言うて居らるる。この釋尊の大切な事を忘れては、佛敎諸宗に對して統一を宣言することは意味をなさぬ、厄除の日蓮だとか日限の日蓮だとかいふのは、俗信だから論ずるに足らんけれども、宗學の上からして日蓮を釋尊よりも尊といなどと言ふに至つては實にその愚笑ふべし、天下に通ぜざる論なりと書いて居らるる。それ故に日蓮門下の人は如何に日蓮聖人を崇拜するからと言つても、絶對無上の本佛釋尊を忘れらるるやうな意味に於て、日蓮聖人を崇拜することは非常な間違ひであります。併しこの事は何も優陀那院師が言うたからといふ證明を要しない、世間には「優陀那院師もさう言ふならば、さうかな」と思ふやうな手合も居るから、序にその事を言うて置くのである。慈々手紙を寫して歸つて來たが、法華經の壽量品に依り、日蓮聖人の開目鈔に基けば宜いので、優陀那院師が若し本經祖書に反すれば優陀那院師が間違つて居るのである。けれども流石優陀那院師はそんな桁外れのことは言つて居りはせぬぞといふ事を附加へて置くのである。

どうぞ諸君はこの開宗の事實及び理想に就て、尙ほ一段と研究を積んで、年々この開宗の日を迎ふる毎に、その信仰を正明にして行くやうにありたいと希望致します。



健全思想とは何ぞ (中)

本 多 日 生

目 次

- 一、己人の權利と責任觀念……二、人格の低劣と放論空言……三、國家的大懺悔……四、思想の標準と佛敎……五、物質主義と禁欲主義……六、獨善主義と罪惡觀……七、兩善不離の病見

一、己人の權利と責任觀念

それから之を個人一人前といふことに就て考へた時、無論自分の權利といふ觀念が全然なくして、如何様な事をされても、踏んでも蹴られてもグズグズだといふやうな事では、これは無論健全とは言へない。けれども唯だ權利を主張することを知つて、責任觀念の無い者は、私は一層不健全ぢやと思ふ。權利の觀念の無い者は無論不健全であるけれども、權利の觀念を主張することのみを知つて、責任を忘れたる者は更に不健全である、權利心の無い者が先づ入院して一ヶ月位を要する所の病人とするならば、權利のみ知

りて責任觀念の無い者は、三年も五年も入院せなければ癒らぬ所の大病人だらうと思ふ、今の新しき文明を語る人間は多くはこの大病人である。舊い文明の者に病氣があるとしても、この方は二三週間で癒る方の軽い病氣であるが、新しい方の病氣といふものは、三年五年入院さして置いても後復は難かしいかも知れぬ所の厄介至極の病氣である。權利病といふもの位恐ろしい病氣は無い。權利の觀念に復れといふやうなどは、二週間で三週間で直ぐ恢復する、權利を與へるといふことになつたならば「權利は與りませぬ」と言つて遁げる奴はないから、直ちに「求めます」といふやうになる。併し責任の觀念を與へやうとしても「ちよつと待つて下さい」私はそんなものは御免蒙ります」と言つて遁げるであらう。であるから權利の觀念を失つて居る病氣は治り易いけれども、責任觀念を失つて居る病人の方は大病人であるといふことを言ひ得ると私は考へる。そこで個人に就ては先づ權利の方面も之を失へば不健全と言はれるけれども、今の有様では責任觀念の無いのが個人としては不健全なる人と斷言して差支ないと思へる。その責任といふことは随分範圍が廣くなつて來るけれども、兎に角家の内に於て考へたら、相當の年齢に達した以上は、家の事に就て脊負つて立つといふ考を以て、親父にも心配させぬやうに、兄弟にも心配させぬやうに、自分が脊負つてこの家の安泰を圖るといふ責任の觀念を有たなければならぬ。自分の儲けた錢はお父さんは手を着ける權利はありません、お父さんはお父さんで錢を儲けるが宜しい、私が儲けた錢はさるさる牡丹餅を食はうが、刺身を食はうが一言ありますまい」といふやうな事を言つて、さうして皆な持つて行つて使つてしまふといふやうな人間は、權利の觀念は知つて居るか知らぬけれども、左様な者は駄目である。どうぞ自分の儲けて來た金を以て親も兄弟も皆な安心させたい」といふ、脊負つて立つ

といふ觀念のある者が、私は健全なる人であると言ひたい。社會に於てもやはりその通りで、能く不平ばかりブツ／＼言つて「イヤどうも世の中は面白くない、第一東京の市會議員といふ者は不都合だ、國會議員も腐つて居る、逦査も腐つて居る、坊主も腐つて居る、誰奴も此奴も大體氣に喰はぬ」と言つて大層偉いやうな事を言つて居る、それぢや貴様どんな事をして居るか、俺はサボタージュをやつて居る……斯ういふやうな人がある、人の悪口を言ふ事しか知らぬやうな人間が、次第に増加して來た、これは社會に於て不健全なる人間であると思ふ。それから人の悪口を言うて廻ることは、集まつて悪口を言はうが、一人では言はうが、風呂屋で言はうが、議政壇上で言はうが、大勢の勞働團體で言はうが、寄つて集つて悪口を列べて居るといふやうな團結は、皆これは不健全なるものぢやと思ふ。モツと眞面目に世の中を善くしやうと思つたならば、不平や悪口ばかり言うて世の中が善くなるものではない、自から脊負つて立つて、どうぞ社會を善くしやうといふ風な、眞面目な運動が起らなければならぬ、それには自分の方から直ほして掛れば宜い、自分の引受けて居る責任の側を直して掛らなければならぬ。例へば坊さんが近頃選舉權獲得の運動を始めて居るけれども、私は大不賛成である、宗教家の爲すべき本分に於て非常に缺けて居つて、さうして選舉權を寄越せといふやうな運動をやる、思はざるも甚しいものである。或は今日に於て坊さんがお布施の値上運動をやるといふやうな事になつたならばどうであるか、それは物價が騰貴したのであるから尤もかも知れぬけれども、己れが爲すべき事を爲さへしたならば、自らそこにそれだけの地位は高まつて來るのであるから、先づ以て自分が能く働きさへすれば、あの和尚さんは中々えらいから、お布施も上げなければなるまい」といふやうになるのである。それを自分の横着の方は依然として置いて、「お布施の方だ

けを……」と言ふ、この根性がいかぬ、左様な頭腦の者が不健全な坊主といふことになる。社會黨般さうぢや、各自が責任の方を重んずるやう風潮を作らなければならぬ。

二、人格の低劣と放論空言

又國家に對してもその通りで、國家は國權を濫用していかんとか、政府の外交は失敗ぢやとか言つて見た所が、外交も内政もないぢやないか、自分一人さへ人の御厄介になつて、時々酔ばらつて逡巡に叱られたりして居つて、それで外交の失敗ぢやといふやうなことを言つて見ても何になるか。政府の外交の失敗を攻撃する位の地位にならうと思へば、餘程みづから盡す所がなければ、それを攻撃するのは滑稽極の事ぢやと私は考へる。それを甘い口に乘せられて、イヤ外交の問題ぢや、イヤ何の問題ぢやと言つて自分が下らない考にあつて、むやみやたらに政治上の事を罵倒する、さういふ事が今の世には流行つて居るけれども、私は是が今の文明現象の中の不健全なる状態であると言ひたいのであります。これは口に税金が出ないものであるから、それで放論空言を爲すので、出たらめの事をツイ言つて居るのである、さうして自分の卑しい所の感情を満足せしめるのである。思想が低いという、悪口が面白く感ぜられる、思想が高くなると人の善行を聞いて之を悦ぶことが出来るやうになる、自分が低いという、人の善い話を聞くと自分が辛くなる、例へば儲けた錢をボン／＼使つてしまふ放蕩息子であるならば「何處の息子は月に五十圓しか月給を貰はないけれども、二十五圓で生活して、二十五圓はちやんと貯金してそれをお母さんの手に送るさうである」といふやうな話を聞くと、心持が悪くなつて来るから「そんな話は止めて呉れ」と言ひ出す。「彼奴は五十圓しか月給取らないのに、賄賂の方で二百圓も取り、友達をちよ／＼まかして何でも

三百圓位毎月使つて居るが、それでも別に借金もしないさうだ」といふやうな話が出ると、「ウンさうか、うまい事をやつて居るナ」といふやうな譯で、悪い事を聞くと嬉しくなる。それは自分の精神の低い時は、人の悪い事を聞いて悦ぶ、精神が高くなるとさういふ悪い事などを聞くと氣持が悪くなる、そこが人格の岐れ路である。今日のやうに人の悪口を聞いて悦んで飛び廻つて居る人間の多いのは、即ち不健全なる人間が多いからである。新聞でも悪い事を書かなければ賣れぬといつて居るけれども、それは鳥が多いからガヤ／＼言つて居るのであらう。さういふやうな事は人類全體の耻辱として考へなければならぬ、それは人格が低いから起る不健全なる現象であらうと思ひます。

三、國家的大體悔

尙ほその外色々問題はありませうけれども、大體今日の文明全部が不健全なる状態に陥つて居るのであるから、總て反省しなければならぬ、大反省の時期だらうと思ふ。一部分を攻撃して己れが善いやうな顔をすべき時ではない。僧侶であつたならば僧侶が先づ自ら、實に今日の宗教としては申譯ござらぬと考へて反省し、大いに奮勵努力しなければならぬ。政治家であつたならば、今日の政治は非常に争ひが低い方面に走つて、黨派觀念の爲に國家を忘れ、文明を忘れるやうな事が多い、慚愧に堪へないと考へて、互に政黨の低劣を反省しなければならぬと思ふ。憲政會は政友會の悪口を言ふ、政友會は憲政會の悪口を言つて、悪口ばかり交換して居るやうな、そんな舊い型は止めて貰ひたいものぢや、人の糊卸しをするやうな事はかり言つて何になる。政治家といふ者が左様に道徳心が無くなり、そんな風にやつて居つては、疎な政治は執れまいと思ふ。又前に言ふ通り労働者に於ても、今日色々の要求をするけれども、日本の労働

者は大體技術に於ても未熟であるし、能率に於ても低いし、且つ遊惰の風があつて、のら／＼からて來て居る、其處に持つて來てサボタージユといふやうな事を覺えて、のら／＼に是を掛けてやり出した、私は今後酷い事になるだらうと思つて居る。諸君も御經驗でありませうが、今日は大工でも左官でも、みなサボタージユをやる、有らゆる事に能率を減退して來た、どの工場に就てお調べになつても、非常に能率の減退を來たして居るのである、又家などを建ててお考へになつても、賃金が上つたばかりでは無い、仕事非常に捗らない、以前百人の人手で出來たものなら、百三十人も百五十人も掛るやうになつて居る。その全體の損害は誰が受けるかといへば、大日本帝國が受けるのであります。そのやうに人間ののら／＼したら能率は減退してしまふのである。私は書生の時分には隨分道を歩いたもので、一日に十五里位は何とも思はんで歩いた、けれども今は歩く事がないものであるから、三里か五里の道を歩いたならば非常に疲れてしまふ、これは使はないからである、使はなければ残つて居るかといふと、残つて居らぬ、使はなかつたならば駄目になる。私が若し郵便配達にでもなつて今日まで來て居るならば、今でも十里や十五里の道はヒョイ／＼飛んで行くであらう、能率といふものは各々使はなかつたならば、それ切り消えて無くなつてしまふものである、故に國民が左様にして能率を吝んで、サボタージユをやる結果は、それだけ國民の能率は無駄に消え去つてしまふのである。過度の勞力はいかぬけれども、過度の怠慢も亦實に恐るべきことであらうと思ふ、今日の日本人は過度の怠慢に陥つて居る、勞働者もさうである、資本家もさうである、即ち總てがさうだらうと思ふ、宗教家なども實に惰け者が多い譯である、有らゆる方面が惰けて居る、日本人の一大弊害はこののら／＼生活です。無駄な話を長い事ベチャ／＼して、結局その話の全體が何の

價值もない、法事に集つても、初めから終ひまで下らぬ事を言つて、少し實のある事を言出せば直ぐ横を向いてしまふ、何の取止めもない無駄話をして、三時間居つても五厘の價值もない事を話合つて居る。その時間修養の話を聞かうとか、平生は忙しいから今日は幸ひ法事に列した機会を以て、善き話を聞きたいといふのではない、やはり性慾の問題や胃袋の問題ばかりガヤ／＼言つて居る、この遊惰の惡風をば、大いに反省しなければならぬ。であるから誰が悪い彼が悪いといふより、國民全體の所謂國家的大懺悔の時に達して居るものと私は思ふのである。先づ一切の仕事は暫く休んでも宜からうと思ふ、政治は三日位廢朝をなさつても宜らうと思ふ、上は總理大臣より下は村役場の受付に至るまで、一切の小さな事務などは三日位執らぬで宜しい。何の爲に今日は費す日かといへば、懺悔の爲に費す日である、精神が劣等の方になつて、實に相濟まぬ譯であると反省して、一般の國民が懺悔するが宜い、官吏は「こんな書類は一日でも片附くのだけでも、十日も二十日も机の抽斗に入れて置いたのは相濟まぬ」といつて一々懺悔する。坊主は、ラクラ坊主、味噌摺り坊主、一齋に懺悔しなければならぬ、教育家は教育家で又その通り、唯だ教はつただけの本を覺えて、鳥カー／＼雀チユ／＼ばかり言つて居つて、何の自覺もなく觀念もなかつたのは、誠に恐入る事でごさると……。皆さういふやうに總ての國民が、人の惡口を言ふのを止めて、自分自分に懺悔しなければならぬ。これをやつたならば幾分か世の中が善くなつて、健全の状態になるだらうが、自分の事は棚に上げて、人の惡口を互に交換して、教育家は坊主の惡口を言ふ、坊主は教育家の惡口を言ふといふ、この舊い型は改めなければいけません。要するに淨き宗教の觀念に活きて、天地宇宙の大精神に成じ、神明佛陀の前に立つて自らの課れる態度を反省して、國民全體が大懺悔をする事に於て、初め

てそこに健全なる思想が勃興して来るものであらうと思ふ。

四、思想の評準と佛教

以上は現状に就て當面の健全不健全をお話を致したのでありますが、尙ほ根本的に正確な標準を得たいと考へ、色々考量して見ましたが、流石に佛教は、えらいものだと思ふ。佛教が、斯ういふものは不健全である、斯ういふものは健全であるといふ標準を立て、居る事が、三千年の永き研究に依つて殆ど今日明白になつて居るが、その型を應用して今の思想問題に當嵌めるといふと、一層これが明白になつて參るのてあります。實はその事を今日は申上げやうと思つたのであります。前置きみたやうな事で大分時間を取つてしまつて、甚だ残念に思ふけれども、折角それを考へて來たのであるから、極く簡潔にそれを話して見やうと思ふ。

五、物質主義と禁慾主義

佛教には佛教の外と内との相違を分ける標準があります。これは外といふのは不健全な意味、内は健全の意味になるのでありますが、この「内外對」の標準を考へて見ると面白いと思ふ。「外」は即ち外道といふ事である、日本人は外道といつたならば非常に悪い事のやうに考へて居るけれども、これは不健全といふ事であつて、佛教より外の哲學、宗教、社會の一般人の考を皆外道といふのである。「内道」といふのは佛教の教の内に這入つて信仰を持つ者を言ふのであります。そこでこの内外對の標準は、外道に就ては「凡夫行」の者と「婆羅門行」の者とがある。釋迦如來は説かれた、これは釋尊最初の説法がさうであります。波羅奈國に行つて最初釋尊が説法せられる時、この凡夫行を諷しめ、婆羅門を諷めて、これは共に不健全で

あるといふ判定を與へられた、それが佛教と佛教外の岐れ目であります。然らば凡夫行といふのは何かといふと、前に言ふ胃袋と畢丸の奴隷となつて生活する者を言ふのである、所謂物質的生活、劣等なる欲望に驅られての生活、唯物的生活、動物的生活、野性的生活と今の文明が叫んで居るがそれである。食ひたいといふ事は野育ちの儘で、子供の時分から腹が空けば乳を求めて泣く、物が言へるやうになれば直に「乳、々」と言ふ、それから「御飯、々々」と言ふやうになる、教育も何もせんで、腹が空いたら食ひたいと言へると教へなくとも、「何かお呉れ〜」といつて手を出す、野育ちの儘である。畢丸の方の要求も、大きくなつたら嫁を貰ひたいと言へると教へなくとも、ちやんと言出す、野性的に於て起るものである、何も學校も要らなければ教育も修養も要らない。凡夫といふのは即ちそれなので、その欲望を充たさんが爲に、金が無くても美味い物が食へぬ、金が無くても畢丸の満足は得られぬといふので金に趨る、丁度今日の拜金的生活——パンを與へよ、幸福を與へよといつて騒いで居る今の文明の争といふものは、この凡夫心の旺盛である、凡夫跋扈の時代である。それからモウ一つの婆羅門行といふのは、凡夫行の正反對に出たので、婆羅門教徒は胃袋を締め上げ、畢丸を締め上げる所の修行をした、であるから一番初めに斷食をやる、胃袋が「腹が空いた」と要求しても、「馬鹿な事を言へ、腹が空いても食はせるものか」といふので、一週間でも二週間でも斷食する、斷食といふのは胃袋を締め上げてしまふ事である。それからモウ一つは生理的の性慾の要求があつてもやはりその通りで、「そんな事はいかぬ」といつて抑へつける、その爲に掌に油を入れて火をつけてパチ／＼手を焼くとか、或は手香を盛つて體を焼くとかいふのは、これは皆畢丸の繋がりにある、畢丸の方の味方をする奴ぢやといつて焼くのである。「これでもか〜」といふので肉體を苦しめ

る、胃袋と罌丸を縛上げるといふので、断肉禁妻、或は断食禁欲といふ事が起つた。禁欲主義、減食主義といふので、「寒くなつた、温かい物を食ひたい、單衣物ぢや寒いから綿入を着たい」といつても「寒いナンといふ事は貴様、身體が言ふのだ、肉ナンといふものはどうでも構はぬ」と言つて、體を巖に打つけ、或は寒中恒河の水の中に投じて肉體を締め上げる。その風が日本の佛教の中にも傳つて、今尙ほ日蓮主義者の中にも遺つて、やはりお粥などを食つて居るとか、寒くとも單衣物を着て居るとか、女を見ても見ぬ振をして居るといふので、「あの坊さんは、えらい、蕎麥粉ばかり食つて居るさうだ」ナンと言はれるのは、婆羅門の遺風が傳つて來たものである。それは釋迦如來はいけないと言ふのである、左様な事をして肉身を苦しめて行くのが正しい觀念ではない、釋迦が最初毘羅城を去つて跋伽婆仙人の所に行つた時に、仙人は直ちに断食をせよと命じた、釋迦如來はこれに反對をした。断食をして徳が積めるといふ事ならば、雪の降つて居る時の野狐が一番えらい者になるだらう、何處を漁つても雪降りつめて一つも食物は得られない、夜となく晝となく鳴きつめて居るが食物は無い、彼は非常な断食の行をして居るが故に、一番えらい物になる譯ではないか、考へて見よ、自分の手で自分を撫てたのも自分を打つたのも同じ事ぢやないか、自分で撫てたからといつて別に功德になる譯でもない、打つたから罪になるといふ譯でもない。人の頭を打つたら罪になるけれども、自分で自分を打つても撫ても何の損益する所があるか、こんな分らぬ親爺は話にならぬといふので、背捨して去つた——背はせなか、捨はすてるで、お辭儀もしないで脊中を向けて、「左様なら」とも言はずに悉達太子は去つたのである。左様な譯で釋迦如來は無論胃袋の奴隷になるは誠めるけれども、胃袋を締め上げて断食をして腹がグー／＼鳴つてもナン構はぬといふやうな事はしな

い。即ち河を向ふの岸に渡らうとするには後が無ければならない、理想目的を達せんとするには、體が無ければならない、渡りに船を愛するが如く、菩薩は道の爲に身體を大切にしなければならぬ、身體を壊してしまつては何の仕事も出來ない。それ故に最も消化の良き物を攝らねばならぬといふので、悉達太子の成道の前には、優婆塞村に行つて可愛い娘から山羊の乳を貰つて飲み、非常に悦んで、之に依つて自分の身體は健康になつて來ると言はれた、それから暖浴といつて、温かい湯に這入らなければこの疲れ果てた身體の恢復は出來ないと言つて風呂に入られ、最後に尼連禪河に行つて清き水に身體を洗つて今度起つて來る時分には、身體が非常に健康になつて、象王の歩むが如く——大きな象がドシリ／＼と歩くやうに、一點畏無き有様になつて、菩提樹の下に座して正覺を成じ得たのである、そこが良い所である。胃袋の奴隷になつてはいかぬけれども、淨き目的の爲に身體を愛するといふことはなければならぬ。であるからその意味に於て金も要るし、食物も要るけれども、それは立派な仕事をするが爲に、人生には金も食物も要るのである、理想の爲の故に肉體の存在を要するのである。

斯ういふ意味に於て婆羅門の形式的の難行苦行を否定し、それから凡夫の劣等なる欲望に落込んで居るのを否定したのが佛教であります。そこで今の世の非常に墮落して、唯パンを求め、肉慾を恣にせんとして居る所の墮落せる人生は不健全である、又宗教なども禁欲主義を唱へて、人生を無視したる悲觀厭世の宗教であるとか、理想を天國にのみ置いて人生を無視するといふやうな事は婆羅門であるから、それは皆いけない、現在の生活に光あらしめ、現在の實生活をして向上せしめねばならぬ、そこに佛教の健全なる意味があるのであります。

六、獨善主義と罪惡觀

次は「大小對」といつて、佛教の中の大乘と小乗の違いを何處に置いたかという、先づ小乗は「自利心」である、二乗根性といつて、自分さへ宜ければ人はどうでも宜いといふ、この二乗根性——獨善的の點を大乘に於て否定して居る。凡夫行を去り婆羅門行を去つて淨き佛教に入つても、自分さへ良ければ宜いといふ、自分の煩惱を恐れ、自分の苦勞を遣はさへすれば宜いといふ獨善主義、自己だけ救はれれば宜いといふ考の者は小乗である、どうしても利他の考に立つて、他を利する事にならなければ駄目である、慈悲の心といふか、菩薩の行といふか、人を益し世を益するやうな働きをせなければ駄目である。モウ一つは小乗は罪惡の心のみあつて、佛性ある事を認めないのがいけない、自己は汚れた者であるとか、詰らぬ者であるとかいふ、自暴自棄といふか、自分の眞の人格を認めないで、唯自分が詰らぬ者だとのみ見捨て、行く事は宜しくない。何處までも人には佛性があつて、表面は煩惱で覆はれて居るけれども、磨けば光る玉である、泥の如くであるけれどもその中から蓮が咲いて出るのだといふやうに、この人生の表面の穢れと、内部にある光とを認めて行かなければならぬ。小乗の輩は唯罪の方を見、穢れの方のみを見て佛性を忘れて居るといふので、小乗は否定されたのである、即ちどうしても佛性を見なければならぬ。

現在の文明が非常に利己的であつて利他の精神を失つて居る場合には、それが勞働運動であらうが、政治運動であらうが、皆不健全である。又人間の本能は食ふ事とつむることぢやといふやうな事を言つて、尊い佛性ある事を忘れて居る思想——西洋思想の生理學から來たのも、進化學から來たのも、經濟學から來たのも、大部分西洋の思想はこの罪惡觀に陥つて、佛性の光を忘れて居る、左様な思想は不健全と謂はな

ければならぬ。それが宗教であつても駄目だ、無論小乗は宗教であるが、佛教の中でも淨土宗や眞宗のやうに「人間は罪ぢや、阿彌陀様に頼め」といつて、威し見たやうな事を言ふものは、佛教であつても之を不健全といふのである。基督教でも悔ひ改め〜といつて、何も悪い事もせぬのにむやみに「あなた、悔ひ改めなさい」と言つて手を引つ張る、あゝいふのは不健全である、反省は人間無論しなければならぬけれども、それが偏つてしまつて、慢心する奴は唯慢心をして居るし、謙遜する奴は罪も無いのに「どうも恐れ入りました、どうぞお助け下さい」と、下らぬ事ばかり言ふ、さういふ事はいかぬ。能く中庸を得て、自分に堂々たる光ある事を認めて、慢心を去つてその光を現して行くといふのが、眞正なる修養である。

七、隔歴不融の病見

それから今度は同じ大乘の中の權教と實教とを分けて「權實對」といふのである。是は何を標準に置いたかという、權大乘教なるものは「隔歴不融」といふ事で、總ての問題が隔たりがあつて融通をしない、佛様に就て言へば阿彌陀如來と釋迦如來との關係が分らない、これが融通して來れば本佛述佛の關係に於て、電燈のやうに幾つも隔たつて點いて居つても、これは皆一つの光であり、三身即一といふ融通が附いて來る。所が釋迦と阿彌陀とは蠟燭の火みたやうに別々のもので關係がない、こつちの蠟燭は太いか細いかといつて吟味するやうなもので、釋迦は娑婆世界に居る、阿彌陀は安養世界に居るといふので世界が別にある、こつちの世界は穢れた世界だ、穢土だ、向ふの世界は綺麗な世界だ、淨土だといふやうに、別のものに考へて居る。けれども本當は何も國土が違ふのではない、同じ國土である、此の土に芳い匂ひの花を植えれば非常な芳い香がするし、同じ土に臭い草を植えればやはり臭い香がするのである、畑が違ふのでは

ない、同じ畑に於て非常な芳き香のする草も生へれば、悪い香のする草も生えるのである、何ほ良い工合に綺麗に拵へてある畑でも、そこへ毒草を播けば毒草が出来る。安養世界が如何に綺麗な畑だといつても、罪の深い婆さんに向ふに放り込めば、それはやはり罪の深い婆さんである。炭園なら炭園を取つて、これを二階へ抛り上げやうが、これを錦の蒲團の上に載せやうが、炭園の玉は炭園の玉ぢやないか、受ける方は錦で受けやうが、雑巾で受けやうが同じ事ぢや。左様な風に自分みづからの内にある光を開くことを知らないで、佛性を忘れて罪だといつて炭園にして置いて、さうして炭園も淨土に抛ればそれが金の玉になつて光るといふやうに説くのが、それが隔歴といふ事である。あらゆる問題がさういふ風になつて隔つて居るから、彼方で行當り、此方で行當りする、三角あたまといふものであつて、これが大乘の中に於ても權大乘といつて駄目ナンである。今日の思想が個人主義であるとか、國家主義であるとか、世界主義であるとかいふ、これは皆三角あたまである、國家を離れて個人が存立する事は出来ない、又世界の文明を顧みずして國家が我儘な事を働けば、理想の國家ではない、何ほ國家が良いといつても、獨逸のやうに人道を蹂躪し、如何なる不法の事をして宜い事になれば、國家は無い方が宜い事になる。であるから今日デモクラシーぢや、人民の權利ぢやといつても、國家の存在を忘れて人民の權利を言ひ居ると、餘り跳ねるが爲に船が壊れて顛覆つてしまふ、踊れといつて居る内に皆ながアブといふと沈んでしまふ。さうかと思つと、國家が大事ぢやといへば個人を忘れる、船が大事ぢやといへば人間はどうでも宜いといつて、みんな人間を海の中に抛り込んでしまふ、人が大事ぢやといへば船に穴が明いても構はぬといふ、さういふのは皆馬鹿者ぢや。人も大事、船も大事、その時と場合に應じてその必要を過たぬやうにして行かなければならぬ、それを馬鹿者に教へると、「人が大事ぢや」と言へば船が壊れても構はぬと思つて、船が壊れると同時に大事な人がアブといふと行つてしまふ事を知らぬ「船が大事ぢや」と教へれば人などは構はぬといふので、少し騒ぐ奴は貴様何をするといつて海に抛り込んでしまふ、さういふ馬鹿な者は何ほ教へても仕方がない。「口上が大事ぢや」といへば、口上ばかり覺えて行つて菓子中途で落してしまふ、「菓子が大事ぢや」といへば口上を忘れて黙つて菓子を突き出す……といふのでは一人前の小僧とは言はれない、所が今の思想といふものは、さういふ油屋の小僧みたやうな事をやつて居る。一つを言へば一つを忘れる、善い事を一つ覺える爲に前の善いものを皆な落してしまふ、デモクラシーの中に善い事がちよつとあると、忠義も孝行も皆忘れてデモクラ、ヘモクラと言ひ居る、女房を可愛がらんならぬといふ事が西洋から流行つて來ると、夫婦の愛情ぢや、ラッは神聖ぢやナンと言つて、家庭の事も親父も忘れてしまつて、先生の前へ出ても惚氣を言つてラッと言ふ、實に馬鹿なこと夥しい。これが三角あたまの産物であつて、即ち隔歴不融である、ゴツ／＼して居る。であるから思想の問題として見た所が、そんなに問題のあるべきものぢやないけれども、段々問題の数が殖えて、問題づくめになつて問題と問題の打つかり合ひをする。何とか問題何とか主義といふやうな事を言つて、名前を覺えるだけでも手帳でも持つて來なければ覺えられない、これが即ち「別教」ともいひ、「塵沙の惑」と佛教で言つて、塵の數ほど左様な事は間違ひが起つて來る。今の文明は別教に陥り、塵沙の惑に陥つて居るから、益々紛雜して人間の心は落着きを失ふのであります。この隔歴不融の反對が「圓融無碍」といつて、實大乘は圓滿に融合して居つて、少しもこだはりの無い立派なものである、これが眞の健全といふものである。



教育勅語と思想問題

本 多 日 生

(9) 自主批判律

モウ一つは自主批判律であつて、外來の文明に對して一概に之を斥けるのは無論いけない、又輕々しく之に溺れるのもいけない。それ故に「善きを採り惡しきを捨て」と仰せられた御趣意に基いて、

又「智識ヲ世界ニ求メテ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」と仰せられた聖旨に基いて、我が日本の文化を基礎にして西洋の長短を觀て、嚴密なる批判を與へ、さうしてその取捨を誤らぬやうに行かなければならぬ。この自主的批判を完うしようとするには、我が在來の文明の全部を明かにしなければいくまいと思

ひます、唯だ精神の教が有難いからといつて、貧弱な意味に考へて居る時には、そこに如何なる哲學があり、如何なる宗教があり、如何なる人生觀があり、如何なる倫理の根柢があり、この紛糾錯雜せる思想問題を解決するに幾何の力ありやといふことになつて參りますと、そこに色々の不足を感じて來るのである、本へ戻るが宜いからといつても、さういふ事では間に合はない。西洋思想といつても、それは惡い所もありますけれども、西洋にも哲學もあり、道徳もあり、宗教もあり、様々の文化もあり、中々彼等は熱心に研究したる思想があるのでありますから、これを自主的に批判せんとするには、自主的思想といふものを餘程能く高め、餘程能く明かにして掛からなければならぬ。自から奉ずる所のものを貧弱にし、淺薄にして置いて外來の思想に對つたなら

ば、自主的批判といつても言葉だけの自主的であつて、事實は漫りにこれを排斥するか、濫りにこれに屈從するか、執れにしても必ずや失敗である。自主的批判を完うするには、我が傳統的文化を忠實に、且つその全體を認めやうに奉持して行かなければならぬ。そこにはどうしても佛教が東洋の哲學であり、東洋の宗教であり、東洋の倫理の根柢であり、斯の如き思想の事に就いてはあらゆる方面を教へて居るものであるから、眞に自主的批判に眼ざめた時は、先づ第一に佛教の門に走つてその教を乞はなければならぬのであります。

それは教育勅語の中には、つきりお示しになつて居らぬやうであるけれども、我が歴史的文明の全體から觀て、吾等祖先の遺風を考へ、又皇祖皇宗の遺訓の全體を考へて來るときには、我が歴世の天皇は

殆どすべて佛敎を奉ぜられたものであつて、吾等が佛敎を信するに至つたことも、その最初聖徳太子に端を發して、推古天皇の詔に依り、歷代天皇の佛敎興隆の事業に基いて來て居るのである、今の教育者が考へるやうなものではない。決して是れは愚民、下民の奉じたものではなくして、賢明なる朝廷より起つて國民に篤敬三寶の誦を普及せしめ給ふたものである、最初の頃の寺はみな朝廷の力、國家の力に依つて建てられたのである。比叡山は桓武天皇が建てられた、東大寺は聖武天皇が建てられた。その他みな皇室が佛敎の興隆には力を添へ給ふた、又天皇が位をお禪になれば袈裟衣を着け法服を召して、仙洞御所に法皇と稱せられたのは歴代いづれもである。此永き千餘年の間が日本文化の大事な時期である、聖徳太子以前の日本の文明は、大事なものがあつ

たにしても、思想文化としては未だ發達せざる時である、明治維新の當年に來る迄の日本の文明、是は全く皇室を初めとして一般民衆がみな佛敎を遵奉して參つたものであります。それ故に自主批判律に於てはどうしても佛敎の事を明かにしなければならぬ。

(10) 統一大成律

最後には統一大成律であります。思想を裁いて行く上にも、吾々の文化を進めて行く上にも、國家が存在して居る所の根本の目的を明かにするの、實は國家でも人生でも何が究極の目的かといへば、精神生活を完成するより外ないのであります。食ふことにまごつくナンといふのは、文明が低いからであります、食ふ位の事は方法によつてどうにでもなるので、所謂生産の配給といふやうなことはそれ程

難かしい事ではありませぬ、それが今日うまく行かぬのは嘘を吐くからである、有り餘る土地があつてもその土地を耕す人間を放逐せんとしたり、食ふ物があるが上にも餘計の者を食はうとしたり、贅澤な事をしたるからである、石炭ならば石炭を程よく分配すれば宜いのに、一方では要りもせぬストークにドン／＼焚いて居るから、一方が足らなくなる、人間が私の心を去つてさへ行けば問題は容易に解決する。物質の調節ぐらゐに永久にまごつくやうな事では駄目でありませぬか。おやが薯の數を算へる位の事は誰でも分る話である、精神の文化を大成する所に人間の面白味があるのである。國家の存在もやはりその意味であつて、國民の幸福といふ事を食はしさいすれば宜いといふのでは、餘程低い話である、諸君考へて見たまへ！ 諸君が子供を産んで、

唯だ食はしさいすれば何も心配ない、お前が死ぬまで毎日米五合とおやが薯十きれ宛ちやんと食へるやうに俺がしてやるから、それで親の義務は済んだ、あとはモウ學問も要らんければ何も要らぬ、唯だ腹がへつたらこれを食つて居れ、といふやうにやつて置くか、それでは豚ぢやないか。そんな事では瀧足出來まい、人間の希望は精神生活にある。そうしてどちらが宜いかといへば、今日のやうに物質のみに走つてはいかぬ、少々ぐらゐ不味い物を食つても精神の生活に活きなければならぬ、幾ら貧しい生活をしても、そこに心の樂しみがあつて、心の希望さへありさへすれば、光と力がある。唯物質にのみ榮えてそこに墮落の生活をなし、道徳もなければ何も無い「グツ／＼言ふナ、五十錢やるから……」といふ位の事で萬事を済まさうといふのは、如何にも低劣

である。それ故にこの文明を大成して行くと言ふは、
 實は思想の問題であり、精神文明のことである、今
 後は國家存立の最も大切な意味を利益の掠奪に置
 かずして、精神文化の競争に置くことにならなけれ
 ば成らぬのであります。

そこで一番大事な思想なり精神の文明はどう進ん
 て行くかといへば、あらゆる思想を統一大成しなけ
 ればならない。不純な文明は是れが防止、撃退、絶
 滅を圖るけれども、採つて用ふべきものは皆その思
 想を豊富にして、いろ／＼の思想が各處を得て發
 達するやうにして參らなければならぬ。之を貧弱に
 して、自分の思想と異なるものは悉く拒斥する、己
 れが淺薄なる思想で居て高き思想を罵るといふやう
 な事があつてはならない。而して物を統一するとい
 ふことは、それだけの高き見識に上らなければ出來

たのである、所が聞く所に依れば佛蘭西は、波蘭が
 亡びたならば露獨境を接して獨逸の復興が非常に早
 くなる、それでは這の大戦争をやつて獨逸を弱らし
 た甲斐がないといふので、波蘭を援ける事になつた、
 援けると云つても別段兵糧を送つたのでもなければ、
 武器を送つたのでも、兵隊を送つたのでもない、
 唯だ大戦に經驗ある才能ある所の良將軍を參謀の
 名に依つて波蘭に送つて、戦の方針を一變した時、
 直に波蘭は勝ち軍となつて、露西亞の軍を兩斷して
 二師團三師團といふ多数の捕虜を得て、國境を越え
 てドン／＼露西亞に攻入つた、亞米利加の大統領も
 「さう行つてはいかぬ、國境で止まれ」と言つたけ
 れども、「承知しました」と言ひながらドン／＼侵入
 してしました、その勇ましい有様は諸君の記憶に新
 たなる所であらう。同じ軍隊であるが、唯だ頭に載

ることではない、軍曹をして旅團を指揮せしむるこ
 とは出來まい、無理にやつた所が戦は敗けてしまふ、
 旅團を指揮する物は少將でなければならぬ、師團
 を指揮する物は中将でなければならぬ、陸海軍の
 全體を指揮する者は大元帥である。今日の多くの思
 想を統率するのに、如何なる主義からでも統率が出
 來ると思ふのは、戦をするのに誰を頭首に置いて思
 宜い、一等卒でも聯隊を指揮することが出來ると思
 つて居ると同じことである。精神の文明を統一大成
 するに就ては、如何なる高き思想、如何なる豊富な
 思想を中心に着いたならば、その全體が統率され
 るかといふ事を考へなければならぬ。同じ思想でも
 統率の方法が悪かつたならば、却て害をなすのであ
 る。彼の波蘭が今の露西亞即ち過激派の爲にやら
 れて、本年の五月頃は殆ど亡國の災ひに瀕して居つ

く者がちよいと更るときに於て、今まで國が亡びる
 といふ状態が、反對に國境を越えて攻入る程の勝ち
 軍になつたのである。思想もその通りである、下手
 な思想を頭にして置けば「こいつもいかぬ、彼奴も
 いかぬ」と大死、のたれ死をさすやうになつて、益
 む思想が混亂する。勇將の下に弱卒なしといふが、
 今日思想にいろ／＼悪いものもあるけれども、之
 を統率する所の大思想を有しない事が、國家の禍ひ
 である。然らばその統率する思想とは如何、是れが
 實は大事ナンである、少々ぐらゐは悪い奴が來ても、
 統率者が良ければ用を爲す、ちやんと軍規が行はれ
 るが、統率者が悪かつた時には駄目である。
 そこで先づ我が過去の思想に歸つて考へたなら
 ば、是れは統一大成して來たものであります、そ
 の統一大成はどうして出來たか、私が屢々論明する

が如くに、惟神の教の良き所と、聖賢の教、佛教の教の善き所とを併せ成して、今日までズツと来て居る。神道の方を考へても十派に分れて居りますが、その中で採るべきものは唯だ一つであります、先づ純神道といふのは儒教、佛教の渡らない前のものがあるから、統一大成といふ事に於ては素朴貧弱である、純粹のものではあるけれどもそれは文化が進まない、儒教、佛教が交はつて初めて日本の文明も豊富になつて發達したことは否むことは出来ない。それが交はつた時起つたものが傳教大師の一貫神道といつて、佛教と神道を併せたものである、それから弘法大師の兩部神道あり、これに反抗したるものが古川惟足といふ人の唱へた唯一神道である、唯一といふのは佛教を蹴つて唯だ神道だけを行かうといふ思想である。それから度會延佳の社家神道とい

ふのは非常に佛教を罵つて、「伊勢の神様は佛教は大嫌いや、坊主などは傍にも寄せぬ」と言つて坊主の參拜を禁じてしまひ、「佛教の息の根を止めるといふ神様の託宣があつた」といふやうな事を言つて非常に佛教を罵つた。それから垂加神道を山崎闇齋が唱へた、是れも儒者から來たのであるから佛教は嫌ひで、恰度加藤弘之が死んだ時やつたやうに、自葬といつて、「お寺で坊主にお經を讀んで貰ふのは忌々しい」といふので、誰にもお經も讀んで貰はずに葬むつた、此頃葬式をせぬで告別式といふことをやるのは、闇齋が先輩ぢや。それからモウ一つは復古神道といつて、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤等の唱へた一派がある、是れが又儒教佛教を極力痛罵したものである、是等の人々は非常に立派な人のやうに言ふけれども、思想としては貧弱なのである。それ

から教會神道といつて、神道に名を藉りて悪い事をするとしても言ふべき、天理教とか選門教とか大本教とかいふやうな俗神道、迷信を鼓吹するものがある。モウ一つは新研究の神道といつて、學者が今いろいろ弄んで居つて未だ目鼻の附かぬ神道である。その外にモウ一つある、それは三教融合の神道といつて、端を聖德太子に發し、さうして前に言うた傳教、弘法、日蓮或は北畠親房卿、水戸光圀卿といふやうな人が代表人物となつて居る、又上は朝廷が即ちそれであつて、聖德太子の憲法は上朝廷より下國民一般に行はれたもので、學者の一家言ではない、我國の國是、國憲として行はれたものである。それは神道の善き所も、儒教の善き所も、佛教の善き所も、併せ成して進んで來たものが日本文明の正統である。度會延佳であるとか平田篤胤であるとかいふ

やうなものは一家言である、我が國是に違反したる僻學者、異端學者といふものである、我が統一大成して進んで居る所の文化を分裂せしめ、貧弱にし、衝突を起さしめたものである、我が文明を誤つた所の罪人である。然るにそれを偉い者に思つて來て居る、今文部省などに於ては聖德太子や光圀卿などの三教融合派を發揮しない、この分裂したる所の固陋貧弱なる頭腦の人が我が文教の上に功績ある人と考へて居るのである、今尚ほその迷ひが覺めない、それは非常な失態である、我が文明史を大觀する所の能力の無いものである。唯だ歴史的に觀察するのみではない、時代思想の紛糾に於てその必要の上から考へ、眞理の研究に於て考へたる時にも、この偉大なる調和したる文明を分裂せしめ、貧弱ならしめたる失態が分らぬといふ事はあるまい、それが分らぬ

やうでは人を教へるなどといふ事は借越であらう。それでは異邦の文明を吸収して

善さを採りあしきをすて、外國に

をとらぬ國となすよしもかな

といふ先帝の聖旨を遵奉することは出来ないぢやないか。過去に吾等の先人が統一大成せられたる文化を破壊し、分裂せしむるやうな事は、新たに起る内外の思想の闘いを適當に統一大成することは出来まい、それだからまごついて居る。論より證據、今日は何といつてもまごついて居る、十分な方針は立てられぬと言ふ、所謂健全派なる人々に就いて御覽なさい、「何とも言ひやうがない、待つて呉れ」と言ふ、「何時まで待つのですか」まだ「中々だ、當分待つて呉れ」……そんな事を言つて居る間にドン／＼悪い思想が傳播して行く、それを見て「しまつ

なければならぬ。「中心としてはこれを維持する」、

「是れは此點がいけないから……」といふ事をモツと嚴密に言はなければならぬ、「佛教でさへあれば金光經でも地藏經でも法華經でも宜いぢやないか」……そんな頭でこの精神文化がどうして大成されるか。命に代へても思想の正邪曲直は明かにして行かんければならぬ、固陋の爲めに言ふのではない、頑冥の爲めに言ふのではない、眞にこの文化的生活を向上せしむるが爲には、正義を正義として闘ふことは賊軍と戦ふよりモツと熱烈なる精神が無くてはならぬ。それが分らぬから何時までも混沌として思想界が覺醒めて來ない、斯の如く論ずる者を固陋であるとかナンとか言つて、唯だどちらでも宜しいと言ふ者が穩健であるとか、包容的であるとか云つて居るから、その間に悪い思想がドン／＼蔓延して行

くのてある。

た、濟まなかつた」と言ふ位の所が、ちてあらう。それでは國家はその災ひを免れることは出来ない、小さな事ならば「待つて呉れ、濟まなかつた」と言つて疊に頭をすり付けて詫言れば濟むかも知れぬけれども、國家の非常な失態を來す時には詫言つて濟むものぢやない、腹を切つても濟むものぢやない、斯の如く重大なる失態を、腹を切つてそれで濟むなどと考へてはいかぬ。それより腹などを切らないでも宜いから「待つて呉れ」などといふやうなまごつてこしい事を言はないで、モツと眞面目に公平無私に、この文明は如何に導くべきものであるかといふことを考へて、どうしても開顯統一大成して來なければならぬ。内外思想の融合とか、東西文明の融合とか言つて居るけれども、そんなボンヤリした融合ナンといふ事は駄目ぢや、ちゃんと統一大成をし

而して斯の如く考へたるとき、我が過去の文明を融合大成した力が何處にあつたかといふ事である。これを内部の神秘的なる説明から云へば、我が皇室の稜威の然らしむる所に相違ありませぬ、又大和民族の偉大なる國民精神に基くに違ひありませぬ、如何なる宗教家が出て、如何なる學者が出て、皆これは大和民族であります、又如何なる善い事も皆な皇室の稜威でありますけれども、皇室の稜威とか國民性の然らしむといふのは一方の言ひ方である、事實實際合はぬものは合ひはしない、合ふべき性質のものでなければ合はぬ。陛下の稜威と雖も決して石と石とを合せてそれが圓子にはならぬ、成るべきものでなければ成らぬ、そんな奇蹟みたらやうな事を言つても駄目ぢや。この偉大なる三つの教は聖徳太

子の言はれる通り、この三法は天然の法則であつて、人間の私に作つたものでないから、處を異にし時を異にして現はれたけれども、三教の中には一脈の合して流れて居る所の大思想があつて、この神儒佛の三教に於ては確に調和統一して進むといふことを聖徳太子が言はれた、それが本當である。どうしても異なる所の思想、例へば今の共產主義であるとか、又はサンヂカリズムであるかといふやうな思想を、如何に皇室の稜威であるからといつても、それが惟神の教とどうして調和するものか、何でも稜威なら行けるといふやうな樂觀は、學者としての思想を研究する態度ではない、有難主義ぢや。稜威は稜威であるが、その稜威の稜威たる所以は、佛敎の如き宗教が早くから日本の文化に入つて來て居るといふ事、百濟の聖明王が佛敎を貢獻する、續いて傳敎出

で、弘法出て、日蓮が出づるといふ事は、稜威の然らしむる所ぢや。諸君考へて見たまへ、孔子の教をいくら研究しても、佛敎といふものは孔子の教の中にこれを統一することは出来ない、何故かといへば「論語」は天道といふ事を説くにしても、「生を知らず焉ぞ死を知らんや」と言ひ、「天道はア、穆として已まず」といふ位の事を言ふのであつて、佛敎の研究とは非常にそこに淺深廣狹の別があるのである。狄きものは廣きものを容れることは出来ない、淺きものは深きものを入れることは出来ない、軍曹が師團を指揮することは出来ない、論語を以て法華經なり華嚴經なりを綜合統一するといふことは出来ない、一合巯に一升の水は入らぬ、奇蹟ならば卒知らずであるが……。それ故に事實はこれを證明する、論語のみを楯に取つた所の物徂徠でも、林羅山でも

伊藤仁齋でも、その他のあらゆる儒者は、排佛家は澤山あるけれども、佛敎と融合してさうして佛敎を發揮するやうな者は居らぬ、純粹の儒者といふものはすべて佛敎を敵視したる固陋なる者である。然らば神道の教はどうであるか、神道の教それ自身が直ちにこの偉大なる法華經を融合するかといふと、神道の根本精神としては無論融合するのである、非常に廣い所の鏡の如き精神で、善さを採り惡しさを捨てるといふ廣大なる教であるけれども、所謂神道家と稱する所の者はどうであるか、これは廣會延佳であつても、或は古川惟足であつても、平田篤胤であつても、今の神官者流でも、國學者でも、今なほ國學にのみ頭を突込んで居る人々は、固陋なもので、淺薄なものである、さう言うたら怒るか知らんけれども、怒つたと言はざるを得ない。我が文化史を

大觀するときに、彼等は何時何處の固陋なる態度を執る、最初守屋が即ちその代表者である、佛敎は夷狄の教である、そんなものは入れてはいかぬと言つて聞かつた、それは遂に戰に敗れたから彼は倒れたのであるけれども、彼に權力を與へて置いたならば、何處までも佛敎を排斥したのであらう。爾後聖徳太子の如き偉人あり、歷代賢明の天皇があつて、高僧碩徳輩出して終にどうする事も出来なくなつたけれども、時々折を窺つてはこれを倒さんとして、所謂佛敎の息の音を止めると言つたり、或は唯一神道が起つて佛敎の撲滅を圖つたりした、幸に天海僧正があつてその厄難を通れたけれども、それが段々來て終に後古神道者が勢力を得て、明治維新の舉に乗じてこの在來の統一ある文明の破壊を試みたものである。その大失態が我が文教の府に移つて、

その失態を失態と理解せずして、是れは正しきものなり、國是なりと考へて、今日尙ほ教育家などの大部分は、その觀念が是正されて居るまいかと私は考へて居る、この點に於ては非常なる大問題があると思ひます。是れが桓武天皇の御代であり、又今申す通り三教融合の聖徳太子の大精神が國是となつて明かに行はれて居る時であつたならばどうでありませうか。今日の思想問題に就ては佛敎を活用せられ、佛敎をしてこの人心の指導に當らしむべき方策を種々々々講じになる次第であらうと思ふ、又それが當然な事である。

聖徳太子でも、菅原道真卿でも、傳敎、弘法は無論であります、水戸光圀卿でも、この三敎を融合する思想は、佛敎をやつた側から出て來て居る。弘法大師が「三敎指歸」を書いたのも、傳敎大師が叡山に

これを敎へたものである、その他坊さんの説敎だからといつても唯だ佛様の有難い事ばかり言つたものではない、必ずや仁義忠孝の敎を語つて、さうして津々浦々に至るまで、教育なかりし日本の國民を今日まで維持し來つたものであります。その内に何があつたかといふことは歴史の成績に炳かなる所で、津々浦々に至るまでも相當なる道徳、人格が發達をして、美談が數へ切れぬ程到處にあるのであります。それは親子の間に、主従の間に、夫婦の間に、兄弟の間に、隣保相扶くる間に、傳ふべき美談といふものは到處にある次第であります。今日よりは恐らくは道徳的精神的の文明に於ては、過去の文明の方が進んで居つたと申して宜いと考へます、例へば武士の魂にしましても、大石良雄とか楠木正成、又彼等一族郎黨の忠君の觀念の如きは、今日の日本

山王神社敎を興隆したのでも、聖徳太子が十七憲法を作られたのでも、皆佛敎をやつた頭腦の人が、佛敎は聖人の敎として尊び、神道は神ながらの敎として尙んで、仁義忠孝の敎、結構です、敬神の觀念結構ですといふやうに、皆その所を得せしめて、さうして更に彼等の足らざる所の高き東洋の哲學、東洋の宗教、東洋の倫理の根柢、非常な立派な文明をこれに加へて、而も威張りも何もしない、やはり神様の前には坊さんも神道の儀式に遵つて居るし、又聖賢の敎に對しても是れは實際の人生を導くには大事だといつて、弘法大師なども總藝種智院を造つて佛敎の普及の爲めに努力して居るし、又永い間各地に於けるお寺では、唯だお經を敎へては居らぬ、「童子敎」などの中に佛敎の道徳を主にしたるものを安然和尚が書いて、佛敎の精神の能く分るやうにして

軍人に對して決して選色あるものとは言はれない、又一般の農民などの間の道徳も、今日のやうに選舉騒ぎで三十錢五十錢の辨當を貰つて騒いで居るよりは、餘程立派なものであつたと思ふ。

それ故に統一大成のこの思想律を重んずる上から言つと、我が歴史に發達したる文化を分裂せしめた罪といふものは、一刻も早く懺悔しなければならぬと思ひます。さもなければ精神文化の上に於て皇運を扶翼する所以でない。一旦緩急あれば義勇公に奉ず」といふ語義から考へて參りますれば、戰爭をする時の事でありませうけれども、併し今日の皇運を翼賛するのは武力のみではありませぬ、精神文化の闘ひ、思想の闘ひが武力の戦ひにも優つて國家を擁護する所以と相成つては、「一旦緩急あれば」といふ、緩急といふ事は、一旦思想の問題が今日の如く紛糾

した時には、思想の解決を附けてその處を得せしめ、大いに皇運を擁護するといふ事が、最も大事な意味

にならなければならぬと思ふのであります。その場

合には「緩急」といふ事を唯だ暇ばかりに考へては

いかぬ、義勇奉公といふ事を武力ばかりに考へては

いかぬ、その場合には文の意を採り、勸語の意義を

拜し、一旦緩急とは今日に於ては思想の問題を、緊

急切實なる問題として考へなければならぬ。その

際には思想界の偉動者を尊ばなければならぬ、思想

界の偉動者を侮蔑して、日蓮坊主とか、傳教や聖徳

太子はいかぬ……と言つて居るのは、國民が思想の

重んずべき事を自覺しない證據である。

それ故に統一大成律の上からして教育勸語を考へ

るとき、「皇運を扶翼」する意味合を教育家が大いに

明かにしなければならぬ。國を肇むる宏遠、徳を

樹つる深厚」といふことも、餘程よく解釋をせられ

なければならぬといふことを考へるのであります。

先帝陛下は

我が國にしげり合ひけりとの國の

草木の苗もおほしたつれば

と仰せられて、異邦の文明を採つて以て我が文化を

翼賛せしむべき大きな思召があり、又

ひらけゆくときにいよ／＼仰がれぬ

ひじりの御代の高きをしへは

と仰せられて、過去の文明を非常に敬慕推賞遊ばさ

れて居る、又

國といふくにの鑑となるばかり

みがけますらを大和魂

と仰せられて我國の天職をお示しになつて居る。決

して西洋に盲従したり、又強りに排斥するのではな

くして、國といふ國のかゞみとなるといふ萬邦の模

範を以て任しなければならぬ。即ち嘗て日蓮が

我が日本國は一閻浮提の内月氏漢土にもすぐれ、

八萬の國にも超えたる國ぞかし。(神國王御書)

日は東より出て西を照す。(顯佛未來記)

と言ひしこの大理想と同一の意味をお示しになつて

居るのであります。先帝の聖旨も日蓮の教訓も皆な

同じ所にあると思ひます。それには餘程眞面目に、

又鮮明なる理解を尊んで行かなければならぬ、斯の

如く思想の問題になつて來ては、政策でもいかんけ

ればごまかしてもいかぬ、感情に訴へて唯だノ

／＼と言ふばかりでもいかぬ。所謂日蓮の言ひしが

如く、今日は開譯堅固、白法隱没の時であるから、

これは最も鞏固なる思想、鞏固なる教義を確立して、

さうして所謂「焙烙千に槌一つなるべし」と言つた

が如く、様々の誤れる思想などは焙烙を碎くが如く
にボン／＼と破つてやらなければいかぬ。何でもな
い思想が出て來る度に一々まごつくやうな事では
かぬ、私は今日この時機に際して、殊に法華經に説
かれたる

難問答に巧みにして其の心畏るゝ所無し。(涌出品)
と謂はれた本化上行菩薩を今更想ひ出さざるを得
ないのであります。

(元)



本經祖書要文講義

本 多 日 生

一、二、四菩薩造立鈔 御狀に云く、本門久成の教主釋尊を造り奉り、脇士には久成地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聽聞仕候ひき、然れば聽聞の如くんば何れの時かと云云、夫佛世を去らせ給ひて二千餘年に成りぬ、其間月氏漢土日本國一閻浮提の内に佛法の流布する事、僧は稻麻の如く法は竹葦の如し、然るにいまだ本門の教主釋尊並に本化の菩薩を造り奉りたる寺一處も

なし、三朝の間にも未だ聞かず、日本國に數萬の寺々を建立せし人にも本門の教主脇士を造るべき事を知らず。乃至今末法に入れば尤も佛の金言の如くんば造るべき時なれば本佛本脇士造り奉るべき時なり、當時は其の時に相當れば地涌の菩薩やがて出てさせ給はんずらん、先づ其の程に四菩薩を建立し奉るべし、尤も今は然るべき時なりと云云、天台大師は後の五百歳遠く妙道に

沾はんと云ひ、傳教大師は正像稍過ぎ已つて末法大だ近きに有り、法華一乗の機今正しく是れ其の時なりと戀ひさせ給ふ、日蓮は世間には日本第一の貧者なれども、佛法を以て論ずれば一閻浮提第一の富者なり、是れ時の然らしむる故なりと思へば喜び身に餘り感涙押へ難く、教主釋尊の御恩報じ奉り難し。

次に四菩薩造立鈔は、前に申した通り本尊に就て教主釋尊と本化の四菩薩の關係を明かにして參つたのである。この事はかね／＼日蓮聖人が仰せられて居つたから、そこで或る人が本門の釋尊と本化の四

菩薩を造るべき時は何時であるかといふ事をお尋ねになつて、それに對して今日は既にその時であるといふ事をお答へになつた。殊にこの中に於ては日本にも澤山寺があつたけれども、本門の教主釋尊並に本化の菩薩を造つた所は無い、今末法は時至れるが故に、本佛並に本脇士を造るべき時であると言はれて、此處に本佛といふ言葉がハツキリ出て居ります、この本佛といふのは壽量顯本の佛で、本脇士といふのは四菩薩を脇士となすといふので本化の菩薩である。日蓮本佛論などと言つて日蓮聖人を本佛とすれば、本脇士といふ者が無くなつてしまふ、であるから左様なものは俗論で、日蓮聖人の信行の上に見られる本佛とは壽量顯本の釋尊、本脇士とは本化の四菩薩を指すことは洵に明白な事でありませぬ。決してあんな思想の出で來る餘地は無い事を、掘じく

り學問で祿でも無い者があんな事を考へ出すのである。椽林で暇があつたものであるから下らない事を考へ出したものである。尙ほ此處に日蓮は佛法の精神の方から言へば、一闍浮提第一の富者であると言つて喜び、その富りといふ喜びは畢竟釋尊より與へられるのであるといふので、「教主釋尊の御恩報じ奉り難し」と仰せられた、決して日蓮聖人は釋尊に對して弓を引くとか、之を侮るといふ考へは毛頭もない。楠公が至尊に對する忠節、乃木將軍の純忠といふが如きあの精神と、釋尊に對する日蓮聖人の態度とは少しも違はぬと思ふのであります。それ故に日蓮の名に依つて本佛釋尊を侮蔑するが如きは、日蓮聖人若しをしたならば如何に之を痛撃されるか分らぬ事でありませぬ。

一三、開目鈔 一切世間の天人及び

て本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千二乗作佛を説いて爾前二種の失一つを脱れたり、しかりといえども未だ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定らず、水中の月を見るがごとし、根なし草の波の上に浮ぶるに似たり、本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打破て、本門の十界の因果を説き顯はす、此れ即ち本因本果の

阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に座して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり等と云云、正しく此の疑を答へて云く、然るに善男子我れ實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗劫なり等と云云、華嚴乃至般若大日經等は二乗作佛を隱すのみならず、久遠實成を説きかくさせ給へり、此等の經々に二つの失あり、一には行布を存するが故に仍ほ未だ開權せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言ふが故に曾て未だ發迹せずと

法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具百界千如一念三千なるべし、かうてかへりみれば華嚴經の臺上十方、阿舍經の小釋迦、方等、般若、金光明經、阿彌陀經、大日經等の權佛等は、此の壽量品の佛の天月しばらく影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品をしらず、水中の月に實月の想をなし、或は入りて取らんとをもひ、或は繩をつけてつなぎとめんとす、天台云く天月を識らず但だ地月を觀る等と云

云、日蓮案じて云く二乗作佛すら猶ほ爾前づよにをほゆ、久遠實成は又なるべくもなき爾前づりなり、其故は爾前法華相對するに猶ほ爾前こわき上、迹門十四品も一向爾前に同ず、本門十四品も涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四卷、其の他の法華前後の諸大乘教に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず。

次に開目鈔の聖訓は、二乗作佛、久遠實成の二大教義に約して、法華經より前のお經はこの二つの失があつたが、迹門は二乗作佛を説いて一つの失を脱

發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず二乗作佛も定まらず。

といふ垂訓は、實に銘記して造次にも忘るべからざる最大要義である。日本の國體に於てもやはり同じ事、皇室の神聖なる意義が分らぬ時に於ては、日本の國體も、國家の歴史も、一切の事が皆分らぬ、又國家精神も分らぬ。皇室の尊嚴と相結んで國民の精神も、國家の歴史も國體も總ての事があるのである、それに依つて大和魂も出來て居る、皇室一つを動かし奉つた時には、國家全體の事も國民精神の全部も覆つてしまふ、それと同じ事である。

それ故に次第々に論じて、何處までもこの釋尊に對する意識を明かにせよ、壽量品の佛の天月のしばらく影を大小の器に浮べ給ふ」ことを理解せよと仰せられた。然るに諸宗の學者等はこれに迷うて、

れた、けれども久遠實成を説かざる故に、一つ脱れた所も亦消え去つて役に立たぬといふ事を論じて、「未だ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず」と示された。發迹顯本とは本佛の光顯即ち佛身觀の最高教義である、一念三千は宇宙觀の最高教義である、二乗作佛は人身觀に於ける佛性論の最高教義である。この宇宙と人身と佛身との三大教義の中に於て、本佛の顯本一つがなかつたならば、宇宙觀も人身觀も悉く眞實が明かにならないものである、「水中の月を見るが如し、根なし草の波の上に浮ぶるに似たり」と論ぜられた、發迹顯本の一事に依つて法華經の三大教義、往いては宗教の本質たる三つの大思想が定まると判決せられたのである、その發迹顯本を輕んじては、如何に法華經を論じて見た所が、何の役に立たぬ。

水中の月に眞の月の想ひをなし、或は之を取らんとし、或は繩をつけて繋ぎ留めやうとする、愚かな事であると云はれた。これは諸宗の學者ばかりではな、今日の日蓮門下の現狀も、本佛を忘れたる時は、假令實相論に行かうが、阿字觀的に行かうが、淨土門的に行かうが、迷信の方から雜亂法華に行かうが、本佛の尊嚴を意識せざる者は皆水中の月に溺れる者である。さうして斯の如き偉大なる教義は一切經の中に於ては法華經本門、本門の中にも涌出壽量の二品に留めたまふのである。さうしてこの涌出、壽量の顯本は、法身的のものでなくして、報身應身の顯本と言つて、人格的實在を明かにせられた。「法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず」で、理論的に宇宙の大生命とかいふやうな事と言ひ現はすのは法身常住論である、釋迦の名に於て、

釋迦の應身報身に於て、絶對の威徳を發揮することを以て壽量品の顯本とするのである。

一四、日眼女釋迦佛供養鈔 法華經壽量品に云く、或は己身を説き或は他身を説く等と云云、東方の善徳佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等、大梵天王第六天の魔王、釋提桓因王、日天月天明星天、北斗七星二十八宿五星七星八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神地神山神海神宅神里神、一切世間の國々の主とある人、何れか教主釋尊ならざる、天照大神八幡大菩

薩も其の本地は教主釋尊なり、例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮ぶ影なり、釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり、譬ば頭をふれば髪ゆるぐ、心はたらけば身動く、大風ふけば草木しづかならず、大地うごけば大海さはがし、教主釋尊をうごかし奉ればゆるがぬ草木やあるべき、さわがぬ水やあるべき。

次に釋迦佛供養鈔にも、諸佛菩薩、諸天善神すべて釋尊の應現活動ならざるなきを説て、天の一月萬水に影を浮ぶと言ひ、頭を振る時髪がゆるぐが如く、大風が吹く時には一切の草木が動き、大地が動けば大

海の騒がしきが如くに、教主釋尊を動かさし奉れば一切の佛神皆動搖をするのである、釋尊一つを忘れた時全部が駄目であるといふ事を痛論せられて居る。

一五、壽量品 父子等の苦惱すること 是の如くなるを見て、諸の經方に依りて好き薬草の色香美き味、皆悉く具足せるを求めて、搗き篋ひ和合して子に與へて服せしむ、而して是の言を作さく、此の大良薬は色香美き味皆悉く具足せり、汝等服すべし、速に苦惱を除いて復た衆の患なけん。
次には妙法に關しての經釋を擧げたので、壽量品の是好良薬の經文、これは父が子供を慰れむが爲めに留め置きし物であるといふことは明かである。

一六、觀心本尊鈔 釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へたまふ。

次に觀心本尊鈔の聖訓は、前に述べしが如く、妙法の内容は釋尊の功徳である。

一七、觀心本尊鈔 天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか、一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠をつつみて、末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ。

この所も同じく本尊鈔の文で、釋尊の大慈悲より

起つて妙法五字の袋の譬が示されて居る、釋尊と、妙法五字と、末代の幼稚たる吾々と、頭に懸けさしめ給ふ日蓮との關係が能く此處に出て居る。その主眼は佛の大慈悲を根本として論を立て、あるのて、佛が大慈悲を起されんければこの妙法五字の袋の中にこの珠は入らず、本化の菩薩を使として遣されないのであるから、吾々の頭にその袋は懸らぬことになる。皆これ佛の大慈悲よりして妙法五字として擣き糶ひ和合して與へ、使を遣はして還つて告げしむるので、みな釋尊の思召より出て居る、それが觀心本尊鈔の總結の文と言つて、一切の纏りを教へた所の聖訓である。

一八、法蓮鈔 此の佛の御功德をば法華經を信ずる人にゆずり給ふ、例せ

この法蓮鈔も母の食物が乳となつて赤子を養ふが如しと言つて、本佛は母の如く、一切の眞理は食物の如く、妙法の五字は乳の如く、吾等は赤子の如く、信仰は乳房に吸ひ付くが如き意味に於て説かれて居る。母と乳との關係に於て本佛と妙法五字とを意識したならば、少しも誤る所はないのである。

一九、聖愚問答鈔 聖人示して云く、今汝が道意を見るに鄭重懇懃なり、所謂諸佛の誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の五字なり、檀王の寶位を退き龍女が蛇身を改めしも只此の五字の致す所なり、夫れ以みれば今の經は受持の多少をば一偈一句と宣べ、修行の時刻をば一念隨喜と定めたり、凡そ八萬

ば悲母の食物の乳となりて赤子を養ふが如し、今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり等と云云、教主釋尊は此の功德を法華經の文字となして一切衆生の口になめさせ給ふ、赤子の水火をわきまへず毒と薬とを知らされども、乳を含めば身命をつくが如し、阿含經を習ふ事は舍利弗等の如くならされども、華嚴經をさとする事は解脫月等の如くならされども、乃至一代聖教を胸に浮べたる事は文珠の如くならされど、一字一句をも之を聞きし人佛にならざるはなし。

法藏の廣きも一部八卷の多きも只是れ五字を説かんがためなり、靈山の雲の上鷲峯の霞の中に釋尊要を結び地涌附屬を得ることありしも、法體は何事ぞ、只此の要法に在り、天台妙樂の六千張の疏玉を連ぬるも、道遠行滿の數軸の釋金を並ぶるも、併ながら此の義趣を出てず、誠に生死を恐れ、涅槃を欣ひ、信心を運び渴仰を致さば、遷滅無常は昨日の夢菩提の覺悟は今日のうつゝなるべし、只南無妙法蓮華經とだに唱へ奉らば、滅せぬ罪や有るべき、來らぬ福や有るべき、眞實なり甚深なり、是

を信受すべし。

聖愚問答鈔にもその意味は一層明白になつて居つて、この妙法蓮華經は何かと言へば「八萬法藏の廣さも一部八卷の多さも只是れ五字を説かんがためなり」と言つて、前に詳しく論明した如く、法華經を結要し、擧げれば一切經を結要して五字に結んだので、釋尊の説法の粹を集めたものであるといふ事が説かれて居るのであります。

二〇、聖愚問答鈔 既に佛を良醫と號し法を良藥に譬へ衆生を病人に譬ふ、されば如來一代の教法を擣錠和合して妙法一粒の良藥に丸せり、豈知るも知らざるも服せん者煩惱の病癒へざるべしや、病者は藥をも知らず病をも

辯へずといへども、服すれば必ず癒ゆ、行者も亦然なり、法理をも知らず煩惱をも知らずといへども、只信すれば見思塵沙無明の三惑の病を同時に斷じて、實報寂光の臺にのぼり本有三身の膚を磨かんこと疑ひあるべからず。

これも同じく聖愚問答鈔に於て壽量品の譬に寄せたのであるので、佛は良醫であり、妙法は良藥であり、衆生は病人であるから、如來が一代の教法を擣錠和合して妙法一粒の良藥に造り上げられたと説かれて居る。釋尊と妙法五字の關係は、この指教に於て頗る明白なことである。私が最初から話した事は、日蓮聖人の聖訓に於て一々證明し得ることであらうと思ふのであります。

斯様にして主なる點は釋尊と妙法との關係、釋尊と日蓮との關係に存するのであります。それ等の事を明かにし、又本門戒壇に就ては、日本の道德と佛

が、自分は先づ是れだけを以て宗旨に關する要領中の要領として拔萃をした次第であります。

致の最高の信仰との融合點を明かにし、さうして根據ふかき光輝ある日本の精神文明を造つて世界に弘布するといふのが、これは唯だ日蓮聖人の希望ばかりではない、我が建國の大精神も茲にある、國民全體の最高理想もそこにあるのであつて、之を忘れたる時我が國家的理想を失ふてあらうと思ふのであります。さうして一方には鞏固なる信念に依つて現在未來が本佛に依つて保障せられ、又國家的活動に於ては皇室の尊嚴を戴いて進んで行く、我れに本佛あり、我れに皇室あり、何の恐るゝ所かあらむといふ信念に活するのが日蓮聖人の宗旨であります。

宗旨に關しては更に述べべき事も多々あります

臨時號豫告

大僧正本多日生猊下講演

先帝の盛徳と國民の反省

統一臨時増刊先帝追憶號
大正十年五月廿五日發行

定價 一部金拾錢、郵税金五厘、百部以上二割引。

戒の意味合から申し上げます。

戒の意義は防非止惡と云ふて、吾人の身口意三業の上に顯はるゝ間違ふた行爲を防止して行くが戒の意義と云ふのでありますが、然し此は未だ充分に其意義を言ひ顯はして居ない、但に防非止惡と云ふ丈では消極的である、斯してはならぬ、してはならぬと止める方面を言ふのである、從來佛教を消極的の宗教であるとか勿れ主義の道德である杯と言ふのは斯ふ云ふ處から言ふたのでありますが、佛教の道德は必ずしも但勿れと計り言ふのでは無い、惡を止むると同時に積極的に善根を積みよと云ふことを教ゆる、故に戒律の根本義は止惡作善である、七佛通戒の偈として佛陀の説き給ふたのには、諸の惡は作すこと勿れ、衆の善は奉行せよ、自ら其意を淨むるは、是れ諸佛の教なり。

(増一阿含經序品第一)

とあつて、戒律の根本義を示して居ります、此通戒

偈の意義が根本と爲つて、種々の戒律が制定せられたのであります、二百五十戒五百戒杯言ふ澤山な戒律は最初から佛陀が制定せられたのでは無く、事實問題が起る度に一戒として制定せられて行つたので、此を隨片隨制と言ひますが、凡て通戒偈の根本理想から定めて行つたのであるが故に、戒律を但止惡の方面計と見るは其全面を見たのでは無い、其全面は積極的作善の意義のあることを見ねばならぬのである、然し小乗教で三學を立てます場合には止惡の方面を多く戒と名け、作善の方面は定慧の二法と名けて居りますから、此場合には戒を防非止惡の方面丈に見る故、小乗佛教を研究したものが、佛教を勿れ主義だとか、消極主義だとか言ふに至つたのである。權大乘には三聚淨戒と云ふて、攝律儀戒(止惡)攝衆生戒攝善法戒(作善)と立てます故止惡作善の兩方面を兼ねて戒と云ふ名で顯して居ります、故に戒の意義は大小乗を通じて止惡作善であると云ふ

ことを其定義と致して居るのであります、戒は馬場に於ける蹄である、馬が場外に逸れぬ様に設けたものである、我々衆生が佛の教を受けて此を信ずる場合に、我等の實行が佛の教の場外に逸れぬ様に之を結付くるが即ち戒律である、前節に言ふ教觀の一致は取も直さず戒律なのである、日蓮聖人が當體義鈔に「日蓮が一門は正直に邪法邪師の邪義を捨て、正直に正法正師の正義を信ず」と御示に相成つたのは日蓮主義の戒法の止惡作善の兩面である。

戒 止惡——正直に邪法邪師の邪義を捨つ
作善——正直に正法正師の正義を信ず

言を換へて言へば、止惡とは佛陀の教法に違背するを止むるのであり、作善とは佛陀の教法に隨順するにあるのであります。

第三節 事戒と理戒

次に戒の相狀が理戒事戒の別あることを知らねば

ならぬ、事戒とは一々に事實の問題を擧げて之を制止して行くのである、理戒とは惡の中の根本の惡を制止し根本の善を勸むるのである、理戒と云ふは第一義根本の戒法であり、事戒と云ふは第二義以下の枝葉の戒法である、此を小乘大乘等の教法に就て分けると左の如くに爲るのである。

事 戒 小 乘
理 戒 權 大 乘
實 大 乘

小乗や權大乘は枝葉の事柄を一々制止して、其根本を捉ふることを忘れて居る、その事戒を制する中にも小乗教は一層細節を論じて、些細の事柄までも制止して行くが、權大乘の方はあまり細々した事は言はないで大體に就いて制止するか故に、同じ事戒でも小乗と權大乘とは其戒律の數に於ても大變に異つて居ります、小乗教で言ふ戒律は七衆別戒と云ふて受ける人に依つて戒が異ふて居る。

小乘 止惡一戒 七衆別戒 作善一定慧

優婆塞、優婆夷—五戒八齋戒 沙彌沙彌尼—八戒十戒 比丘—二百五十戒 比丘尼—五百戒

新様に種類も澤山に分れて居り戒律の數も澤山に爲つて居るが、權大乘教では、最も重大なるものを制して、枝葉細末の戒律を論じないのである。

權大乘 止惡—攝律儀戒—七衆同戒 十重禁戒 作善—攝衆生戒—攝善法戒 四十八輕戒

此戒律は梵網經、瓔珞經、等の中に明されて居るのであります。受ける人に依つて違はないのと其數も減つて居る處が小乗とは違ふ處であります。現今天台宗や禪宗杯て授戒會と云ふことを致しますが、多くは此權大乘の戒律に依つて行つて居るのであります。

實大乘たる法華經の戒は理戒であつて、一々事相の上に戒律を申しさせせて、根本の惡を制し、根本

の善を勤むることを其戒法と致します、迹門と本門とに於ては強て其戒相を區別する程に差異は無いと、思ふのであります。法華經に於て言ふ處の根本の善根本の惡とは何であるかと云ふと、

第一義戒 (止惡—謗法禁斷(捨邪法邪師之邪義) 作善—對本尊の信仰(信 正法正師之正義))

である、本佛の大慈悲に感孚し、是好良藥の南無妙法蓮華經を信念受持する、此信仰が善根の中の根本善根である、此信仰を破り佛陀の教法に違背するもの、此を謗法とし最大罪惡として此を禁止するのを止惡の根本とするのである、謗法の事に就ては本篇第八章第六節の下に委しくお断致した事故再び申上げませんが、日蓮主義の信仰は此根本の戒律を持つて行くので、今身より佛身に至るまで能く持ち奉る南無妙法蓮華經を誓願し、此信仰を誤らざる様警戒し注意して行くのが本門の第一義の戒法と云ふのである。



史 料 宗門史料(續)

清 村 編

上總宮谷本國寺末(十九ヶ寺)

上總國山邊郡大網村宮谷 經王山 來傳寺 同

永田村 金珠山 光昌寺 同

長柄郡萱場村 東福山 本大寺 同

七渡村 七渡山 龍鑑寺 上總國長柄郡粟生野村

小幡村 連塔山 蓮成寺 同

國府關村 殿谷山 如意輪寺 同

舟木村 寶照山 安樂寺 同

箕輪村 神明山 圓藏寺 同

越谷村 住光山 法泉寺 同

山邊郡大網村 壽量山 淨眼寺 同

上總大網蓮照寺末(十四ヶ寺)

上總國長柄郡粟生野村 寶珠山 圓立寺

國府里村 日滿山 廣福寺

千代丸村 千代山 大正寺

内長谷村 妙藏山 妙照寺

山邊郡萱野村 妙意山 正法寺

南富田村 大黒山 福田寺

北富田村 大寶山 東福寺

清名幸谷村

長久山 本成寺

同 長光山 妙本寺

柿餅村 妙光山 常光寺

木崎村 法永山 正國寺

長國村 寶光山 妙慶寺

九十根村 大黒山 本城寺

桂山村 月光山 桂德寺

一ノ袋村 一袋山 延命寺

同 久遠山 妙行寺

同 同 同 同

同 同 同 同

同 同 同 同

同 同 同 同

同 同 同 同

同 同 同 同

同	門谷村	法布山	正	因寺	同	武射郡推崎村	妙流山	松	名寺
同	貝塚村	照應山	蓮	成寺	同	武勝村	第六山	本	松寺
同	清名幸谷村	開陽山	東	光寺	同	木原村	六所山	藏	光寺
同	新屋敷村	延壽山	長	福寺	同	津邊村	常龍山	東	漸寺
同	南橫川村	東遊山	三	光寺	同	武射村	正立山	本	隆寺
同	大綱村	應當山	信	行寺	同	求名村	群名山	高	福寺
同	同	香珠山	大	詮寺	同	下總國印旛郡山梨村	月光山	松	源寺
同	上總國中法光寺末(三ヶ寺)	長榮山	本	福寺	同	上總東金西福寺末(十八ヶ寺)	羽黑山	妙	福寺
同	上總國山邊郡福俵村	正榮山	法	道寺	同	同	常住山	大	法寺
同	大豆戸村	正法山	妙	榮寺	同	同	月光山	常	光寺
同	小野村	經王山	善	福寺	同	同	山玉山	大	林寺
同	上總國山邊郡富田幸谷村	妙流山	光	明寺	同	同	正寶山	嶺	根寺
同	下布田村	本松山	東	源寺	同	同	本立山	長	福寺
同	雨坪村	極樂山	本	極寺	同	同	中峙山	壽	福寺
同	極樂地村	不老山	藥	王寺	同	同	安中山	本	成寺
同	上布田村	東金村	大	豆谷村	同	同	菩提山	正	覺寺
同	上總松之郷本松寺末(十二ヶ寺)	北幸谷村	中	村	同	同	法榮山	寶	藏寺
同	押堀村	永正山	立	善寺	同	同	本妙山	圓	福寺
同	同	天神山	高	福寺	同	同	同夢山	願	成就寺
同	川場村	寶永山	東	福寺	同	同	道場山	元	福寺
同	上谷村	要源山	常	福寺	同	同	第六山	圓	因寺
同	南橫川村	妙法山	芳	墳寺	同	同	正道山	仲	正寺
同	前之内村	安立山	常	覺寺	同	同	帝王山	妙	善寺
同	下總國千葉郡長作村	本勝山	長	胤寺	同	同	證林山	證	圓寺
同	印旛郡小谷流村	法流山	永	福寺	同	同	光照山	本	滿寺
同	白井庄吉田村	長榮山	最	成寺	同	同	智興山	本	妙寺
同	上總東金本漸寺末(二十八ヶ寺)	成就山	本	隆寺	同	同	廣開山	本	成寺
同	上總國山武郡片貝村	東頭山	妙	覺寺	同	同	長證山	長	漸寺
同	小關村	多寶山	妙	本寺	同	同	正覺山	本	圓寺
同	武射田村	長光山	蓮	成寺	同	同	東光山	妙	國寺
同	宮村	流光山	法	華寺	同	同	長國山	高	福寺
同	菱沼村	熊野山	清	瀧寺	同	同	金峰山	植	草寺
同	瀧村	長榮山	本	光寺	同	同			
同	幸田村				同	同			

同	三ヶ尻村	寶樹山	東美寺
同	酒造村	妙高山	圓藏寺
同	下野國那須郡龜梨村	長榮山	妙福寺
同	武藏國淺草新島越	法立山	常福寺

記事

京都總本山大法要

四月十一日より十三日迄は例年の通り大法要修行、本年は聖誕七百年記念なり且つは明治天皇第十週年に相替せる事として略んど止暇斷職の活動を爲す。大法要中は雨天續きなりしも熱心なる地方參拜者は二日目に各院座満員となり中水館講堂何れも満し詰の盛況を呈したりき、十一日は洞堂施主教學財團施主各祖先の法要、十二日は明治天皇第十週年法要、十三日は宗門功勞者祖先の法要、續いて大施餼鬼會を執行す、本年の各教區代表登山僧は新築落成の澄龍室を本城と定められたり、左に大法會中全國布教士の奮闘を記載せん。十一日午前七時於本堂法話、渡邊日命師午後三時於本堂説教、中村日鏡師午後七時於講堂日蓮主義大講演會、同會の辭「金光孝順師」釋尊の傳道「松本監晴師」人生と信仰「國友日鏡師」聖訓と奉奉行「野口日主師」十二日午前七時於本堂法話、大橋日鏡師午後

統一閣月報

△二日土曜講義「四信五品鈔」木村日保師「人生の最大藝術」日蓮主義綱要「井村日鏡師」△三日、日曜講演「人生の最大藝術」林尾義郎氏「久遠の生命と佛性」木村義明師「遺時と修正」井村日鏡師、聽衆二百名△八日午後六時釋尊降誕會并講演會「王法と佛法」小林文學士「釋尊の降誕を頌す」野口日主師△九日、土曜講義例の如し△十日、日曜講演「獅子王の如き心を持てる者必ず佛に成るべし」村岡本量師「釋尊の久遠」高木日鏡師「開目の要義」笹川日堂師聽衆三百名△十六日、土曜講義△十七日、日曜講演「日蓮主義と修養」星野純義「生活と信仰」林尾義郎師「日蓮聖人の三大特長」關田日鏡師、聽衆三百名△廿三日、地明會、講師井村日鏡師△同夜土曜講演△廿四日、日曜講演、應現の佛陀「土屋信玄」感激の力「森川泰洲」信仰より人格へ、木村日保師△廿八日同宗會、法要并大講演會、日蓮主義と乃木將軍「伊豆少將」如法思國「本多親下」

各地の思想戰

◎千葉通信 三月十六日於佐倉町妙經寺降誕紀念法要後於大勝館講演會并藝術傳道七百名「日蓮聖人の人格其一」齋藤日章師「本化上りの使命」關田監督布教師△十七日於同所八百名「日蓮聖人出現の目的」關田僧正△十八日於本源寺一千名「日蓮聖人出現の目的」關田日城師「日蓮聖人の人格其二」齋藤日章師△十九日於寶泉寺「日蓮聖人出現の目的」關田監督布教師「日蓮聖人の人格」齋藤日章師△廿二日於木更津町成就寺法要後於遊樂館講演并藝術傳道九百名「日蓮聖人出現の目的」關田監督布教師△廿五日、於千葉市公民會一千餘名、同會の辭「武田文學士」肉より靈へ「國友監督布教師」日蓮聖人出現の目的「關田監督布教師」思想問題の規範「本多親下」終つて同所於演藝館藝術傳道來會者一千二百名△廿六日於土氣本郷町本壽寺六百名「聖誕七百年を迎へて」渡邊布教師「久遠の靈光」國友監督布教師△廿七日於市原郡大正校三百名「生きたる死せんか」草切布教師「感激の精神與起の力」國友文學士△廿八日於本傳寺、講師中村日鏡師△廿九日於長生郡長柄小學校一千名、少壯布教師數名出演後「本より存知の旨なり」山根監督布教師△卅一日於本納町蓮福寺武田布教師栗原布教師山根監督布教師等出演、終つて於本町藝術傳道來會者三千餘と云ふ△四月一日於長尾寶泉寺武田布教師山根監督布教師の講演手代本師の統一節ありたり△二日於關村本法寺法要講演及藝術傳道、武田布教師、山根布教師出演來會者二千八百名△四日於大網町蓮福寺「佛に就て」土屋聖平師、△夜於大正館講演藝術傳道一千餘名「本化上りの使命」關田監督布教師△五日於增城村小學校「自覺覺他」成島布

◎神戸教報 四月九日於神戸製鋼所「正しき信仰と其効果」本多親下
 △十日於神港俱樂部四百名「日蓮上人の人格と其主張」本多親下△廿
 七日於精進會六百名「日本の文化と聖徳太子」本多親下
 ◎豊橋教報 四月一日御降誕七百年大法要後講話、本多親下△同夜
 「開會の辭」西井文學士「思想問題大觀」加藤少將「日蓮上人の遺教」
 本多親下、晝夜共聴衆滿堂△十七日少年會三百名「開會の辭」本
 「講話」加藤少將「蛙の京見物」鈴木「説教の功德」鈴木啓爾「一寸法
 師と蛙」西井文學士「開運太師」大竹直治△廿一日立正會「聖徳太子
 の御遺業」西井文學士「思想問題」對する態度「中川監督奉教師」

川文學士△四月七日於釜山第七小學校「日蓮主義の使命」矢頭伊吉氏
 「欲望の淨化」横山惠正氏「日蓮主義とは何ぞや」中川文學士、四百六
 十名△八日於釜山税關「開會の辭」吉田法學士「現代思想の基調」中
 川文學士

名古屋常德寺の日蓮主義大宣傳

梵鐘搬入

◎釜山教報 三月廿六日於天晴地明會聖誕慶祝法要後講演「開會の
 辭」横山會長「本佛實在の妙旨」中川文學士、八十名△廿七日於釜山
 座「開會の辭」矢頭幹事「御遺文拜讀」坂本朝氏「慶祝文朗讀」武幸介
 氏「祝電披露」野中大尉「祝辭所感」山上學務主任「聖誕七百年を迎
 へて」吉田法學士「人生解決の要件」横山惠正氏「聖代生活と日蓮主
 義」中川文學士、七百五十名△廿六日於祝儀俱樂部「思想問題」對す
 る吾人の態度「中川文學士△廿八日於牧の島金福俱樂部」自覺より協
 調へ「中川文學士△廿九日於釜山第七小學校」混亂の巷に立ちて」中
 人格「龍仁」一十師
 ◎釜山教報 三月廿六日於天晴地明會聖誕慶祝法要後講演「開會の
 辭」横山會長「本佛實在の妙旨」中川文學士、八十名△廿七日於釜山
 座「開會の辭」矢頭幹事「御遺文拜讀」坂本朝氏「慶祝文朗讀」武幸介
 氏「祝電披露」野中大尉「祝辭所感」山上學務主任「聖誕七百年を迎
 へて」吉田法學士「人生解決の要件」横山惠正氏「聖代生活と日蓮主
 義」中川文學士、七百五十名△廿六日於祝儀俱樂部「思想問題」對す
 る吾人の態度「中川文學士△廿八日於牧の島金福俱樂部」自覺より協
 調へ「中川文學士△廿九日於釜山第七小學校」混亂の巷に立ちて」中
 人格「龍仁」一十師

五月十三日 維新當時梵鐘を失つて以來此所に五十餘年、檀家の
 間には常に梵鐘購入の相談ありしが歸らず、今回漸やく其議なりて
 數日前梵鐘は既に名古屋へ到着し、今日愈々搬入する事になつた
 のである。午後二時一同御前今井氏方に集合し、三時を合圖に檀信
 徒を先頭とし、出入職人三十餘名之に次ぎ、梵鐘は牛車にて引き木
 道音頭勇ましく出發した。少年少女會員數百餘名は途中にて奥迎
 へ、宣傳歌を高唱しつゝ常德寺へと繰り込めば、見物人は沿途に途
 列し、其間を各新聞記者盛に活動せり。

梵鐘供養並大法要

廿一日 戰爭の如き準備中に夜明ければ絶好の快晴、萬物生々とし
 て木々に鳴く雀の音もいと愉快げに聞ゆ。午後三時となれば稚兒百
 餘名は數町離れし集合所より、音楽を先頭に群々と出發しぬ。然し
 自度大法要並大講演會を終了する、聴衆千九百餘名
 廿三日 御遺文講義、本多親下聴衆二百餘名此日午後三時頃より
 一天候にかき曇り、雷電しきりに至る、加ふるに二日間の大法要
 に疲れし爲聴衆は僅かなりしが、豪雨の降りしきる夜をシムミリと
 信仰篤の講義を聴く事を得し聴衆は唯感涙の涙に暮るゝのみなり
 き。尙今回の大宣傳が、世間に如何なる影響を及ぼせしかは左記一
 二新聞の記事にて窺ひ知る事を得ん。

百五十餘名の稚兒の練行列

常德寺に於ける本多大僧正等の日蓮主義大宣傳
 願本法律宗管長本多大僧正の日蓮上人三百遠忌大法要親修が昨廿
 一日午後三時より市内中區新榮町常德寺に於て盛大に行はれた。境
 内及寺院前には紅白の幔幕を引廻らし聖訓を書き付し旗紙をなし附
 近の人家は悉く軒頭に鐘供養或は日經上人三百遠忌と染抜ける提灯
 を吊し其間を肩を影どり口紅をさし、綺麗の装ひを凝らせる稚兒數
 十名が右往左往してゐた、當日の之等稚兒は總て百五十名程にて檀
 家及近隣有志の子女を以て之に當て、宮出町の集合所より順路常德
 寺に練行列をした、而して當日併せて梵鐘供養をも修行し本多大僧
 正の嚴肅なる禮儀に次いで常德寺住職國友日斌師以下門徒信者有志
 の檀徒ありて午後五時中に供養を終つた。境内右手の稚兒控所には
 附添ひ人が多數詰揚本多大僧正の親修に參詣せんとする善男善女の
 群は院外にも溢れて居た。略(名古屋毎日)

聖誕七百年慶讚大法要

廿二日 午後一時より説教金光孝碩師、上田智賢師と講演し、午後
 三時より稚兒の練行列昨日の如くに行はれ、四時より管長親下御親
 修の下に聖誕七百年慶讚大法要親修さる、此日も參詣の善男善女五
 千餘名夜間は日蓮主義講演會にて、武田顯龍師、井村日成師、野口
 日主師、一日蓮聖人の御妙例「本多親下等熱筆を振はれ午後十一時芽

聖誕七百年法要と大講演

日蓮主義を叫ぶ佐藤中將。常徳寺願ふ
市内中區新榮町常徳寺にては廿一、廿二兩日をトして宗祖日蓮聖人の聖誕七百年慶讃法要と開基日經上人の三百遺忌法要に梵鐘供養を兼ねて管長本多日牛師導師となり敢かに修行した廿一日は朝來から同寺の境内には露店さへ張られて信徒或は町内からの稚兒百餘名の可愛い姿を見んと参詣の男女の群も少からぬ雑沓を爲し午前十一時梵鐘供養を終つてから原田日野野口日主兩師の説教があり夫れから午後三時より日經上人の三百年忌の法會があつて夜七時から熊井本光佐藤海軍中將、本多日牛師等の日蓮主義大講演會があつたが廿二日は引續き功勞者祖先進福法要聖誕七百年慶讃法要あり午後七時より前日同様日蓮主義大講演會が催される筈である。(新愛知所載)

四日市安樂寺入佛開眼 供養並大講演

當市に願本法華の正義を宣傳して已來、知法恩國の熱誠と、日蓮主義の正統を光揚する道場を建設するに至り、此所に功成り五月十四五兩日現當山安樂寺本堂落成入佛開眼供養並紀念大講演會を開催した。土敷日に亘る不眠不休の諸事の準備と、稀なる好晴の天候と加ふるに泗水の宗教界に大覺醒を促した本多大僧正祝下の御視修と至願の感化とも稱すべき大迫陸軍大將閣下の御臨感なれば、兩日に亘る大法要大講演は、當市未曾有の大盛況であつた。名古屋よりは宣傳隊遠征し來り其の奮闘報は權宗權門には一の驚長であつたであらう。兩日の次第は、第一日は、富田濱山露氏別邸より本堂を奉送

し、市内三體橋にて、天童、教區僧員、各地より参列の僧員、發願人、世話人、統一團員、其他禮信徒にて奉迎して、午後一時より、音楽練行列にて、順路寺に至つた、沿途見物人にて埋め、稚兒約一百名なれば、約五丁に亘る長蛇の行列は、實に美觀であつた、斯て本尊を奉安し、國友僧正を大導師として、大法要を執行した。夜は開堂第一回の講演なれば、聴衆約一千五百名、笠川僧正は、「健全なる思想の養成」大迫閣下には、「明法天皇と日蓮聖人」の題下に熱辯を振ひ本多祝下には、「正法正義」の題下に、日蓮主義の統一ある大主義を縱横に講ぜられた。この紀念すべき安樂寺初轉法輪は、聖人の主義の偉大を感ぜしめ、歡喜の裡に閉會した。第二日は、午後一時より丸池兒玉氏宅より、前日の隊伍にて繰出し、管長祝下大導師として莊嚴に入佛開眼供養を誦修す、管長御親修なれば、前日に響る参詣者堂に溢れ隨喜の信徒より發する唱題の音聲はいとも高らかに、袈裟即放光の出現を思はれた、二日間亘るこの盛儀も目出度處に終りし益々安樂寺の前途は、佛陀三寶寶照の下に、光輝ある大主義を宣揚する事であらう、聖誕七百年の時期に際し、開堂入佛供養並大講演は、最も有意義な報恩行である。入佛式に各地より祝辭祝電を以て、御受授を賜はりし百餘名の諸氏各位には、誌上より深謝致します。



本多日生祝下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
- 日蓮主義初步 金七拾錢
- 日蓮主義綱要 金壹圓五拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の感激 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
- 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
- 國民教化 金貳圓貳拾錢
- 法華經の伴 金貳圓貳拾錢
- 戰士の伴侶 金貳圓貳拾錢
- 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
- 聖訓要義 各卷壹部金貳圓貳拾錢
- 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
- 聖語錄 金貳圓八拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 法華經講義 上卷下卷各一部金壹圓四拾錢

大藏經要義 法華經要文

先帝の盛徳と國民の反省 一部金拾錢郵税金貳錢

大藏經要義刊行會 振替東京三一五九六番

一冊	金拾錢	送料一錢
一ケ年	金參圓參拾錢	送料共
一頁	金拾錢	
一頁	金六圓	
四分の一頁	金參圓半	

前金の事

大正十年五月廿七日印刷納本
大正十年六月一日發行

不許複製

發行所 編輯所 印刷所

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

編輯所 統 編輯所 統 編輯所

名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常徳寺内



目 次

更に進め我軍の戦士	本多日生
健全思想とは何ぞ	本多日生
慈悲の日蓮	佐藤鐵太郎
本經祖書要文講義	本多日生
遠慮なき皇道大本教の批判	記者
日蓮聖人教義綱要	井村日成
宗門史料	山根日東
記事報道十數件	

第廿五年七月號

第一第三百十七號
 大正三十年二月二十四日第三種郵便物認可